

第II地区

第II地区では近・現代の擾乱が多く中世に遡る遺構は少なかった。調査区北側には8m×8mの防空壕の跡があり遺構面は完全に破壊されていた。防空壕の中からは、大型の焼夷弾筒が2個発見された。1945年の神戸空襲の惨劇を思わせる遺品である。

第II調査区で検出された遺構は、溝1条・落ち込み状遺構1ヶ所のほかに、ピットが多数ある。しかし、ピットの大半は近世～現代に及ぶもので、中世に属するものは少なく、建物を構成するような柱穴列も確認されなかつた。溝は幅50cm～1m、深さ50cm前後の規模を有する。南北方向に流れる溝で、調査区なかほどで二股にわかれ更に南方で交差している。埋土は淡灰色の粗砂で、遺物の出土は



fig. 419 第II地区平面図

なかった。時期は不明である。また、調査区南端付近で西国街道と方向を同じくする柱列が検出されたが、近世末～近代に属するものと考えられる。

第III地区

第III地区は第II地区と同じように近・現代の擾乱が多く中世に遡る遺構はさらに少なかつた。出土した遺物量も極端に少なく、時期が判断できる資料は僅少であった。遺構は溝3条、土坑1基とピット30基程度のほか時期不明の杭跡が検出されたのみである。遺構中からの遺物の出土も少なく、時期については決めがたいが、他の地区に近い13～14世紀代に属するものと考えられる。

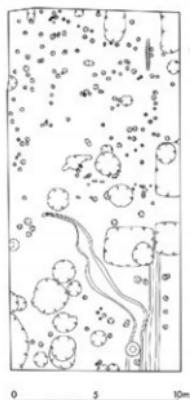


fig. 420 第III地区平面図

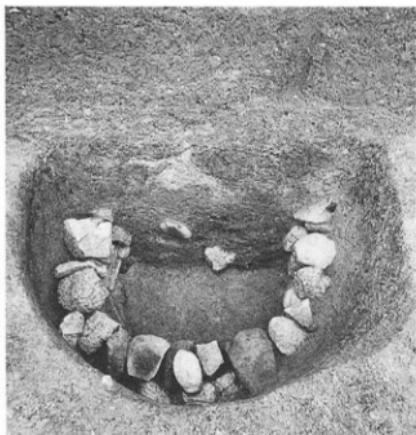


fig. 421 第IV地区 S E 01

- 第IV地区** 第IV地区は第I地区の東隣接地にあたり、遺構の濃密な存在が期待されたが、近世の耕作痕と中世に属すると考えられるピット3基のほか井戸1基が検出されたにすぎない。耕作痕は、第I地区同様条里方向に沿ったもので、溝中からは陶磁器片が若干出土した。
- S E01** 今回の調査で唯一検出された、中世に属する石組みの井戸である。掘形は径1.05m、深さ60cmと浅いものである。検出面下25cmのところから内径50cmで円形に石組みがなされている。石組みは径10~20cm程度の河原石を用いて、3ないし4段に組み上げられている。底部は曲物などは設置されず、粗砂層となっていて、湧水が認められた。埋土から13世紀代の遺物が出土している。
- 第V地区** この調査区の遺構面では、近世のピット・井戸・円形土坑に混じって中世後半のピット・井戸・溝状遺構・性格不明遺構等が検出された。
- ピットの多くは調査区の北半に集中して検出されたが、建物としてまとまるものではなく、ピットからの出土遺物もほとんどなく時期の決め手に欠けるが埋土の状況からして中世後半と思われる。
- 調査区の南西側で検出された木組井戸(S E01)は、西側が攪乱されているが隅丸方形を呈している。一辺2.7mの掘形の中に、17枚の縦板材を円形に組むものである。井戸の内径75cmで、検出面からの深さ1.8mを測る。井戸の底に曲物などの水溜めの施設は確認できなかったが、井戸底内には、親指大の砂利を多く敷きつめていた。遺物は、掘形と井戸枠内から僅かに陶磁器が出土した。時期は室町時代前半頃と思われる。



fig. 423 第V地区 S E01

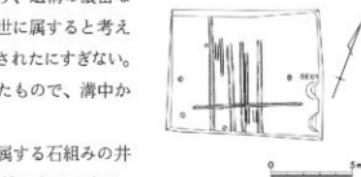


fig. 422 第IV地区平面図

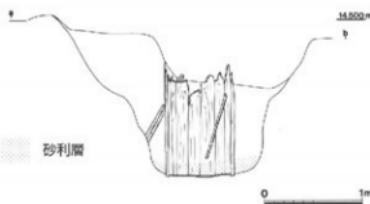
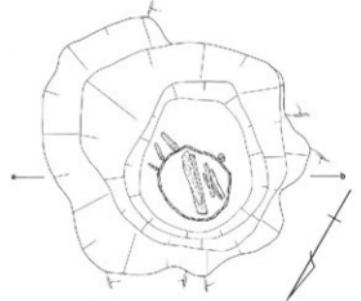


fig. 424 第V地区 S E01平面図・断面図



fig. 425 第V地区平面図

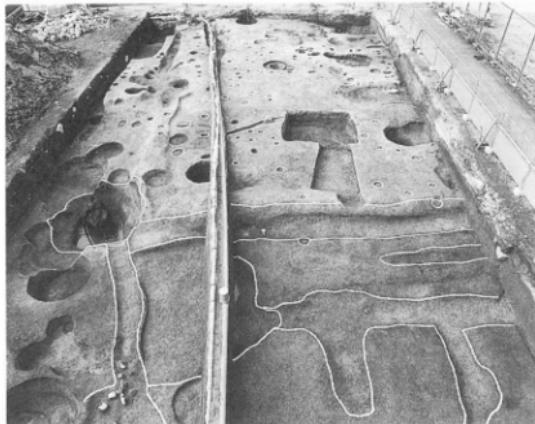


fig. 426 第V地区全景

溝状遺構のS D01は、東西方向の溝で第VI地区まで続き、幅110～120cm、深さ30cmを測る。S D02も東西方向の溝で櫛形状を呈し、幅60～65cm、深さ15cmを測る。この溝は共に14～15世紀頃の土師質土器、陶磁器が出土している。

S X01は、不定形の落ち込みで最大幅2m、深さ20～25cmを測る。遺構は第VI地区まで延び、そこから南側に向けて溝状遺構となっている。埋土の灰茶色砂質土層からは15・16世紀頃の陶磁器が出土している。遺構の性格は不明である。

S X02は調査区の南側で検出された不定円形の落ち込みで長辺3m、短辺2.5m、深さ20cmを測る。S X03は調査区の南端で検出された不定形の落ち込みで、調査区外に広がるため全体規模については判らないが深さ30cmを測る。この遺構は共に中世後半の遺物が出土しているが、S X03からは常滑焼と青磁碗片が出土している。

第VI地区

この調査区も第V地区と同様に近世の遺構に混じって中世後半の遺構が確認されている。主だった遺構は、ピット・溝状遺構・土坑・性格不明遺構である。

遺構の検出状況は、調査区全体で確認されているが、第V地区と同様に多くのピットは調査区の北半分に集中している傾向がある。また、調査区の西側では、第V地区から続く溝状遺構の続きが確認されたが、南北に流れる近世の溝と円形土坑群により、中世後半の遺構面は存在しなかった。

ピットは第V地区と同様に、近世のピットに混じって中世後半のピットが検出された。これらのピットも建物としてまとまるものでない。

調査区の北東隅で検出された溝状遺構のS D01は、第I地区で確認された遺構の続きで幅150cm、深さ30cmを測る。この溝の東側では、直径約8cmの杭列の痕跡が確認されている。また溝内からは、長さ8cm、幅5cmの軟石に人面が彫られた石が出土している。

その他の溝状遺構からの遺物の出土は少ないが、いずれも埋土が包含層に酷似しているため中世後半頃と考えられる。



fig. 427 第VI地区平面図



fig. 428 第VI地区全景

S K01は、長さ190cm、幅125cm、深さ15cmを測る楕円形の土坑である。埋土の暗灰色砂質土から若干の遺物が出土した。

調査区の南側で検出されたS K02は、長さ280cm、幅210cm、深さ30cmを測る不定楕円形の土坑である。埋土の暗灰色砂質土からは遺物は出土していない。

S K03は、直径100cm、深さ30cmを測る円形の土坑である。埋土の灰褐色砂質土層からは若干の遺物が出土している。

調査区の東側で近世の土坑群に切られて検出されたS X01・02はいずれも埋土が灰褐色砂質土であるが、遺物の出土はない。

3. まとめ 第I地区では柱穴とおもわれる遺構も多数発見されたが、掘立柱建物などの住居址は、確認できなかった。また直ぐ北側をとおる西国街道に関連するような遺構も確認されなかつた。しかし、溝内からの大量の土器は近地に居住地があったであろうことを想定させるし、井戸や、時代は下るが近世の耕作痕も発見されており、中世以降この付近に人々が生活していたことは明らかである。

第V・VI地区では、13～15世紀を中心とした遺物の出土があり、ピット・溝状遺構・土坑等はその時期に相当する遺構であると考えられる。特に木組井戸の存在はこの地域での集落の存在を示唆するもので、今後の調査によっては建物の存在が確認される可能性がある。この地区では、中世以前の遺物の出土ではなく、遺物の傾向からして当地域では鎌倉時代後半から室町時代前半にかけての集落の存在が想定され、近世にまた集落が営まれるようである。この地区周辺では、過去に調査がされていない今後の調査により新たに遺跡が発見される可能性がある。

たるみひゅうが 59. 垂水日向遺跡 第16次調査

1. はじめに

垂水日向遺跡の発掘調査は市街地再開発事業に伴い、昭和63年に開始され、これまでの調査で、縄文時代～鎌倉時代の遺構、遺物が発見された。また調査の進展と共に、各時代の遺構の面的な分布状況を把握し得るようになってきた。

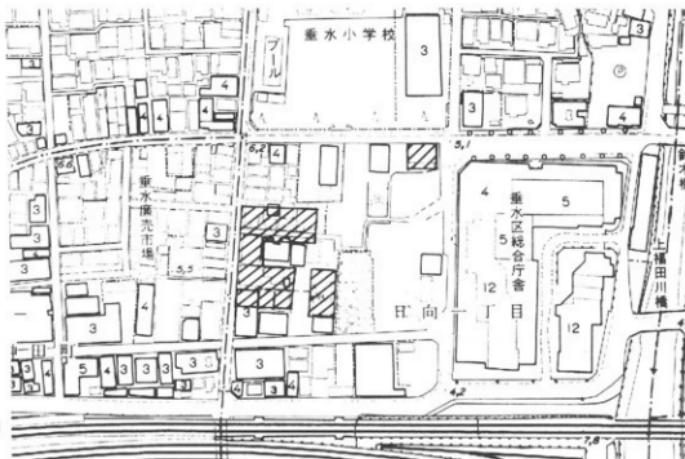


fig. 429
調査地位図
1 : 2,500

2. 調査の概要

A 区

平安～鎌倉時代
微高地と低湿地

今回の第16次調査は、A, B, C区、3カ所の未調査部分を順次調査を行った。

当該時期のA区は、微高地から低湿地への変換点に位置し、北東～南西へ下がる地形である。湿地が北西～南東方向に進入しているため、土坑、ピットが調査区東半分に疊らに散在する。また、調査区北端から南東方向に近世末～近代の石組みの溝が延びる。

微高地と低湿地の接点付近から、平安～鎌倉時代の土器、ウシまたはウマの歯が投棄された状態で発見された。また、浅い窪み（SK101）から土器類がまとまって出土した。

これまでの調査で、A区東側の微高地上に当該期の集落が確認されており、この集落に居住した人々の廃棄品が湿地に投棄されたと推定される。

古墳時代
微高地と低湿地

調査区の低湿地の上層には前述の平安～鎌倉時代の遺物が堆積し、下層の褐色系シルトには、古墳時代前期～後期の土器を若

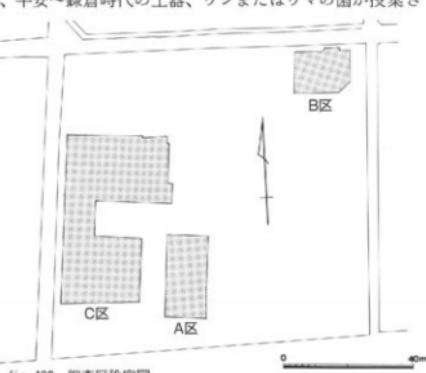


fig. 430 調査区設定図

干含んでいる。当区では、微高地に当該時期の遺構は確認できなかった。

縄文時代中期～後期

洪水砂層

微高地を形成する黄褐色系シルトの下層は、砂礫を主体とする洪水砂層が約1.5mの厚さで堆積する。この砂礫層の上・中層から木材化石と大量の木の葉が出土した。

これらは、南東部で集中して発見されており、洪水の流速の弱い部分に溜まったものと推定される。

縄文時代前期

鬼界アカホヤ火山灰

約6300～6400年前に、南九州沖で爆発した鬼界アカホヤカルデラの火山灰（K-A h）がこれまでの調査で何ヵ所か確認されたが、当調査区では洪水砂層に削られしており、北東部と南半部で4mほどしか残存していないかった。また疊痕（ripple mark）はごくわずか検出されたが、単位は測定できなかった。

縄文時代早期

足跡

鬼界アカホヤ火山灰の下層は、青灰色～青灰褐色シルト、極細砂が堆積し、当時は海岸近くの干潟の状態であった。他の地区と同様にこれらの層から、T.P. 1.8m付近でヒトの足跡を検出した。足跡は調査区の北端部で7歩分確認された。足跡の大きさは遺存状態の良いもので長さ20～25cmを測り、大人である可能性が高い。



fig. 431 A区平安時代～近世遺構面平面図



fig. 432 A区平安時代～近世面全景



fig. 433 A区縄文時代早期面足跡

B 区 当該時期のB区は、微高地上に位置し、現地表下約30~60cmで古墳時代~平安時代の古墳~平安時代遺構が確認された。

S B101 調査地北東部で検出され、全体の1%程度が確認された。方形の竪穴住居址と推定されるが、一辺の長さが判らず建物規模は明らかにできなかった。深さは約10cm残存し、堆積土内から土器や炭化材、焼土が出土した。出土土器の時期は庄内並行期である。

S B102 調査地北西部で発見された。一辺4.1m、深さは約5~10cm残存しているが、近現代に掘られた穴によって搅乱を受けており、正確な時代、形状は不明である。



fig. 434 S B101

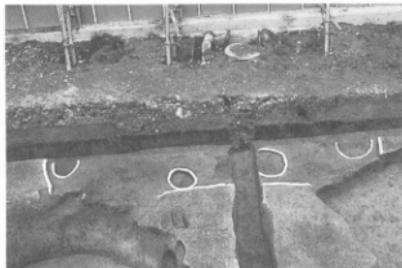


fig. 435 S B102

S B103 2×2間の総柱建物で、建物の規模は4×4m、柱間の距離は平均1.4mである。掘形の直径は80cm~1mを測る。掘形の大きさと建物の形状からみて、倉庫のような機能を持つ建物が想定される。なお、掘形内からは、土器の細片が出土したが正確な時期は明らかにできなかった。しかし、これまでの調査では、同規模の平安時代の建物が数棟確認されており、この建物が当該時期のものである可能性が高い。

その他、土坑、ピットが検出されたが、出土遺物が少なく、時期は不明である。

**洪文時代中期~後期
洪水砂層** 微高地を形成する黄褐色系シルトを除去すると厚さ約1~1.5mの砂礫層があり、大量の木の葉と若干の樹木を含んでいる。

自然木は、北西部と東端部で集中して出土した。幹、枝材が多い。砂礫は北東~南西方向の水流によって堆積したことが土層断面の観察で明らかである。

**洪文時代早期
足跡** 洪水砂の下層は、青灰色~青灰褐色シルト、極細砂が堆積し、他の地区と同様に、当時は干潟の状態であった。T.P. 1.8m付近で、動物の足跡を検出し、T.P. 0.8m付近ではヒトの足跡の検出した。足跡は調査区の南西部で2歩分確認された。これより下の調査については、湧水が激しく確認が不可能であった。なお、この調査区では、鬼界アカホヤ火山灰は上記の洪水砂層に削られており、残存していないかった。

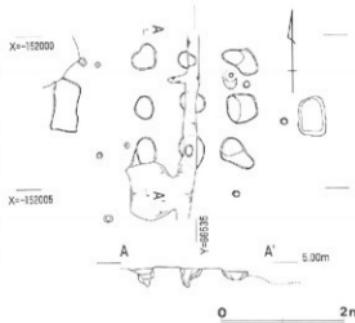


fig. 436 S B103平面図・断面図



fig. 437 B区古墳～平安時代面全景

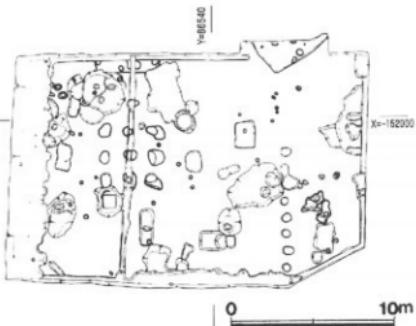


fig. 438 B区古墳～平安時代遺構面平面図

- C 区 この時代には後述の湿地が埋没して、調査区はほぼ全面が耕作地（水田）となっており、
平安～鎌倉時代 その耕土層を掘り込んで、長さ約34m、深さ10～20cmの溝が北西端からほぼ南北方向に
S D101 延びている。南端で、溝は一旦途切れ、再び2m南に延びていた。堆積土内から土師器の皿が完形品で出土した。
この溝は、C区西隣に広がる微高地と耕作地（水田）を画する遺構と推定される。
- 古墳～奈良時代 この時代には、調査区を北西～南東に斜めに横ぎる湿地が存在する。従って北東端と南
微高地と低湿地 西端は微高地の末端部にあたる。この湿地からは、奈良～鎌倉時代の土器が大量に出土した。その多くは西端で集中して発見され、A区西側の微高地に営まれた集落から投棄されたものと推測される。なお、湿地堆積土下層からは古墳時代の土器若干と滑石製の勾玉が1点発見された。
- また、微高地と湿地の接する部分では偶蹄類（ウシ？）の足跡が無数に検出された。



fig. 439 C区全景

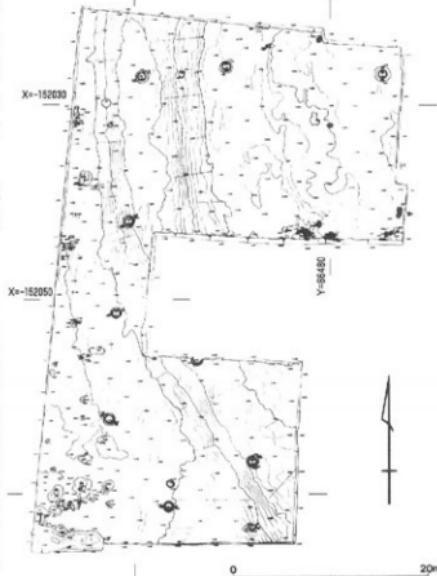


fig. 440 C区微高地末端と低湿地平面図

- 縄文時代中期～後期 洪水砂層** 微高地を形成する黄褐色系シルトの下層は、砂礫を主体とする洪水砂層が約1.5m～2m堆積する。この砂礫層の上・中層から木材化石と大量の木の葉が出土した。しかし、この洪水砂層はC区西半分では急激に薄くなり、西端では全く堆積していなかった。
- 縄文時代前期 第1漣痕検出面** 洪水砂層から出土した縄文土器は、中・後期に属するもので、大部分は磨滅がないことから、この調査区の近辺から流されて堆積したものと考えられる。
- 縄文時代前期 第1漣痕検出面** 調査区西端では、洪水砂層によって削り残される状態で、鬼界アカホヤ火山灰層の堆積層が良好に残存し、これまでの調査でも確認されている漣痕が検出された。また、北東部では、洪水砂によって火山灰層の多くは流失し、島状に残っていた。
- 縄文時代前期 第1漣痕検出面** 漣痕はこれまでに検出したものと同様に、単位は24～28条／1mで南東～北西方向の波によって形成されている。波の方位はN16°～31°Wであるが、N20°～25°Wのものが多い。
- 縄文時代前期 第1漣痕検出面** 原則として、波は岸に平行に打ち寄せることから、当遺跡付近は縄文時代前期頃には、弧を描く小さな入江であったと想定される。
- 縄文時代早期 第1足跡検出面** 鬼界アカホヤ火山灰層の下層には、青灰色～青灰褐色シルト、極細砂が堆積し、当時は海岸近くの干潟の状態であった。T.P.1.4～1.5m付近で、ヒトの足跡が多数発見された。
- 縄文時代早期 第2足跡検出面** 足跡の方向はまちまちで、重なっているものも多いため、歩行状態を特定できるのはごく少ない。しかし、おおまかには、南北方向に歩行しているものが多いようである。
- 縄文時代早期 第2足跡検出面** 南半部のT.P.0.5～0.6mあたりでは、一部に均質な極細砂が堆積し、その上面で漣痕が検出された。単位は、21～22条／1mで南南西～北北東方向の波によって形成されている。波の方位はN20°～25°Eである。
- 木製品？** T.P.0.4～0.5mでは、ヒトの足跡と偶蹄類（シカ？）、水鳥の足跡を検出した。
- ヒトの足跡** ヒトの足跡は、C区全体で検出された。歩行状況が明瞭に判り、北東～南西、南北方向に歩いているものが多い。足跡は20～30cmの長さがあるが、泥地を歩行しているため、本来の足のサイズは不明である。
- 木製品？** また、調査区南半部の足跡検出面で、木製品の可能性が高い薄い板を発見した。これは、2.8×2.5cm、厚さ約3～4mmではば方形を呈する。また、中央部に斜め方向に直径約4mmの穿孔を施す。用途は不明であるが、大きさと形状からみて服飾品の可能性がある。



fig. 441 C区漣痕面



fig. 442 C区第1足跡面

3. ま と め A区では、東半分で土坑やピットが検出された。当該地は、微高地から湿地に変わる場所である。従って、これまでの調査で発見された建物群の縁辺部にあたり、遺構の密度は疎らである。B区は、微高地上にあたり、平安時代の掘立柱建物址、土坑、ピットが検出された。当該時期の掘立柱建物址は第5、7、8次調査でも発見されており、今回の調査でさらに北へ建物群が拡がることが判明した。C区は、微高地から湿地へ移り換わる場所で、調査地西隣に広がる微高地と耕作地（水田）を画する溝が発見された。

平安～鎌倉時代 A区では、微高地から湿地に変わる当時の水際で平安初め～奈良時代の遺物が、当時の集落があった微高地の方向から投棄された状態で出土した。また、湿地内堆積土から古墳時代の遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。B区では、古墳時代～鎌倉時代の堅穴住居址が検出された。C区ではA区と同様の状態で遺物が発見された。また、湿地堆積土から古墳時代の土器とともに、滑石製の勾玉が1点出土した。

古墳時代中期～後期 微高地を形成する黄褐色系シルトの下層は、砂礫を主体とする洪沢砂層が約1～2mの厚さで堆積する。この砂礫層の上・中層から木材化石と大量の木の葉が出土した。

木材化石と木の葉は、A区では南東部、B区では、北西部と東端部、C区では、北半部で集中して発見されており、いずれも洪沢の流速の弱い部分に滞留したものと判断される。また、現地で根を張っていた痕跡は確認されなかった。

この洪沢砂層はC区西半分では急激に薄くなり、西端では全く堆積していなかった。このことから、福田川寄りの第1次調査地より西に連続する縄文時代中・後期の大洪水の西端が、昨年度に引き続き確認されることになる。

縄文時代前期 鬼界アカホヤ火山灰は、今回の調査では、A区では大部分が洪沢砂に削られおりB区では、全く残存していないかった。C区の西端部では、洪沢砂によって削り残される状態で鬼界アカホヤ火山灰の堆積層が良好に残存し、これまでの調査でも確認されている謹痕が検出された。また、北東部では、洪沢砂によって火山灰層が削られ、島状に残っていた。

検出された謹痕の方向から、当時の地形が弧を描く小さな内湾であったことがこれまでのデータの蓄積と合わせて推測できるようになってきた。また、昨年度の15次調査ではこの当時の海岸線を発見したが、これによって垂水付近では、最大でT.P.2.4m付近まで海水準が上昇していたことが判明した。当時の海水準を知る貴重な資料である。

縄文時代早期 上記の火山灰の下層は、青灰色～青灰褐色シルト・極細砂が堆積し、当時は海岸近くの干涸の状態であった。A、B地区とともにT.P.1.8m～0.8m付近で動物またはヒトの足跡を検出したが湧水が激しく、歩行状態を充分に把握できなかった。

C区では、ヒトの足跡が多数発見された。検出状況から、頻繁な通行があったことが認められ、当時の集落から干涸を経て海岸線に向かう通路であったことが推測される。

第2謹痕検出面 また、C区南半部のT.P.0.5～0.6mあたりで、2枚目の謹痕が発見された。上層で検出された謹痕とは方向が異なっていることが判明した。

第2足跡検出面 T.P.0.4～0.5mでは、ヒトの足跡と偶蹄目（シカ？）、水鳥の足跡を確認した。

ヒトの足跡は、C区全体で検出された。その多くは歩行状況が明瞭であり、北東～南北、南北方向に歩いているものが多い。なお、当遺構面で、服飾品の可能性がある木製品が出土したが、その用途については今後の検討を要する。

60. 垂水日向遺跡 天ノ下地区

1.はじめに 垂水日向遺跡は、垂水区名谷付近に端を発する福田川と天神川に挟まれた東西に細長い平野部の河口付近に位置しており、明石海峡に面した標高4.0m~7.0mの沖積地上に立地している。

当遺跡周辺は、戦後いち早く市街地化が進んだため、埋蔵文化財の分布状況は不明であった。昭和62年度に、市街地再開発事業に伴う試掘調査によって、遺跡の存在が明らかとなつた。その後の調査により、遺跡の範囲が、さらに西側の陸ノ町・神田町及び天神川下流域の天ノ下町にまでの東西600m、南北350mの範囲に及んでいることが判明した。



2. 調査の概要 発掘調査区が、山留め工事の工程及び資材置き場の関係等から、調査予定部分を一度に調査することが困難であったため、調査区をA区～F区の6つに分割して発掘調査を実施することになった。なお、B区については、妙見山麓遺跡調査会が調査を実施し、E区（約300m²）については、その後の調査により、遺物包含層がひろがっていないことが判明したため、発掘調査が不要となった。

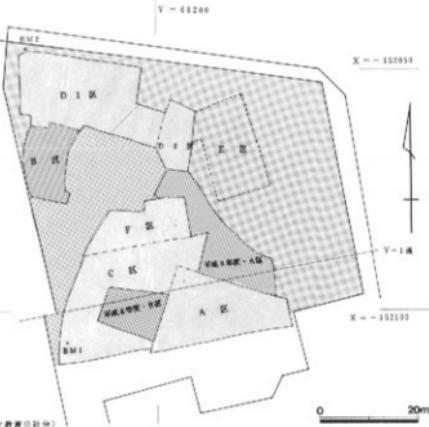


fig. 444
調査区設定図

A 区 A区は、遺跡の縁辺部に相当しているため、遺構・遺物の検出状況が極めて希薄であり、また、現代の搅乱が著しいため、遺構面の遺存状況も良くなかった。

遺構面は、現地表下約 2.0m～2.2m（標高 6.00m～6.20m）の黄褐色砂礫土層上面で検出した。検出した遺構は、井戸 1 基のみである。

S E01は、調査区の西側で検出された井戸で、平面形は円形を呈しており、直径 1.6m × 1.6m、深さ 2.0m～2.2m を測る。井戸枠が検出されなかったため、素掘りの井戸と考えられる。時期については、鎌倉時代頃のものと思われる。

C 区 C区についても、A区同様、遺構・遺物の検出状況が極めて希薄であり、また、既設管の埋設に伴い、著しく搅乱を受けており、遺構面の遺存状況も良くなかった。

現地表下約 1.7m～2.2m（標高 6.20m～6.50m）の黄褐色砂礫土層上面で、遺構確認作業を実施したが、検出遺構はなく、出土遺物も極めて少量であった。

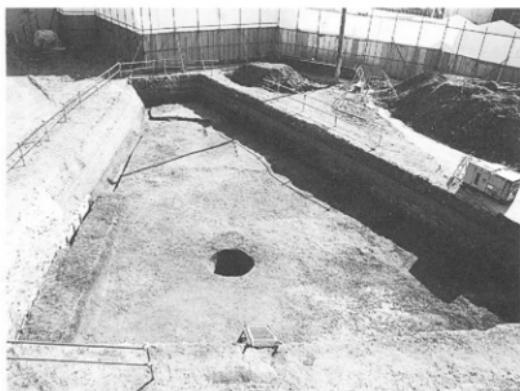


fig. 445 A区全景



fig. 446 C区全景

D 区 D区についても、遺構が検出されたのは、西端のみで、中央から東側については、全く遺構が検出されず、遺物包含層も途切れていた。遺構面は、2面確認された。

第1 遺構面は、現地表下約 1.7m～2.0m（標高 5.25m～5.30m）の暗黄褐色砂質土層上面で検出した鎌倉時代頃の遺構面である。

検出した遺構は、土坑 1 基、溝状遺構 1 条、ピット 1 基である。

S K101は、調査区の西端で検出された楕円形の土坑で、長径 90cm 以上 × 短径 60cm、深さ 10cm～15cm を測る。南側は、調査区外にのびている。埋土内から、須恵器椀・白磁碗等が出土している。

S D101は、調査区の南西端で検出された溝状遺構で、全長 2.0m 以上、幅 60cm～70cm、深さ 10cm～30cm を測る。北側は搅乱で切られており、南側は調査区外にのびている。

第2 遺構面は、現地表下約 1.9m～2.2m（標高 5.00m～5.10m）の暗青黄褐色砂質土層上面で検出した古墳時代～平安時代頃の遺構面である。検出した遺構は、土坑 1 基、ピット 2 基である。



fig. 447 D区全景

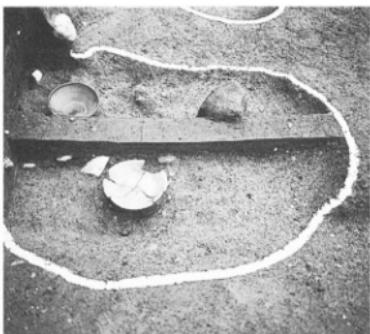


fig. 448 D-1区SK01遺物出土状況

SK01は、調査区の西端で検出された楕円形の土坑で、長径 90cm以上×短径 85cm、深さ 5 cm～10cmを測る。西側は、調査区外にのびている。埋土内から、平安時代頃の須恵器椀・土師器皿が出土している。

ピットは、いずれも直径 35cm～45cm、深さ 10cm～15cmを測る。

F 区 F区は、今回の調査の中では、比較的多く遺構・遺物が検出された地区である。

遺構面は、現地表下約 2.0m～2.2m（標高 6.10m～6.25m）の暗黄灰色シルト層上面で検出した古墳時代頃の遺構面である。検出した遺構は、自然流路 1条、土坑 2基、ピット 5基である。

SD101は、調査区の西側半分で検出され、幅 13.0m以上、深さ 0.5m以上を測る。

埋土内より古墳時代前期末～中期頃の土師器高杯・甌等が、かなり纏まって出土している。

SK102は、調査区中央付近からやや東側で検出された楕円形の土坑で、長径 1.1m×短径 65cm、深さ 5 cm～12cmを測る。

ピットは、いずれも直径 20cm～30cm、深さ 5 cm～10cmであるが、建物としては纏まらなかった。

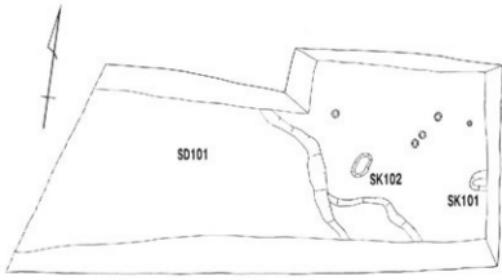


fig. 449 F区平面図

3. まとめ 今回の調査区においては、F区とD区西端を除けば、ほとんど遺構・遺物が検出しなかった。また、試掘調査の結果からみて、今回の調査地の東側には、遺跡はひろがらないと推定されるため、今回の調査地は、遺跡の縁辺部に位置していると考えられる。

しかしながら、今年度、妙見山麓遺跡調査会が調査を実施したB区や今年度調査のF区等では、古墳時代前期～中期頃の土器器が多く出土しており、今後の調査及び資料の検討等によって、当遺跡の性格・時期等が明らかになってくるであろう。

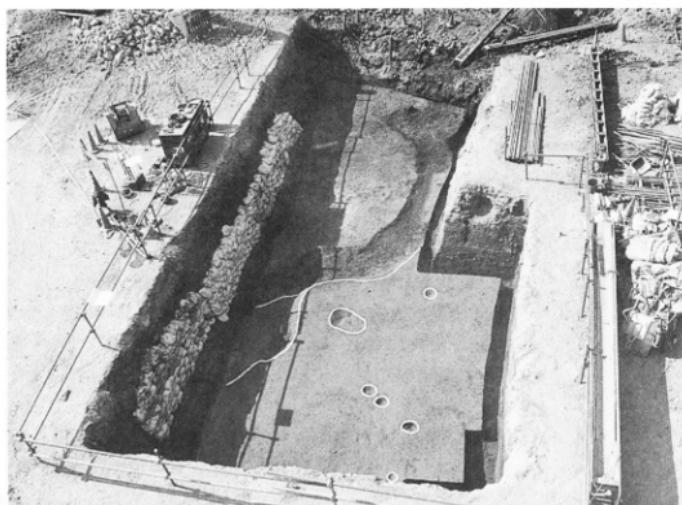


fig. 450 F区全景

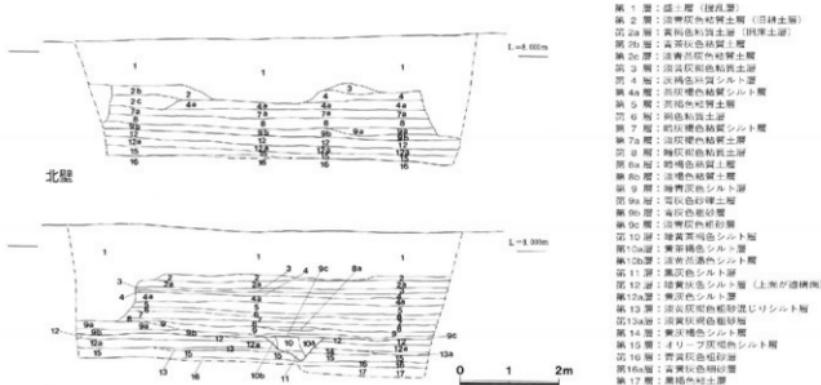


fig. 451 F区北壁断面図

61. 垂水日向遺跡 天ノ下地区

1. はじめに

当遺跡は、福田川と天神川に挟まれた沖積地上に位置している。周囲には西方約1kmに県下最大の前方後円墳の五色塚古墳や中世の野田遺跡が存在している。

これまでの調査では、縄文時代前期以前の人の足跡や縄文時代中期～晚期の遺構、弥生時代末～古墳時代初頭の住居跡、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物群等が確認されている。



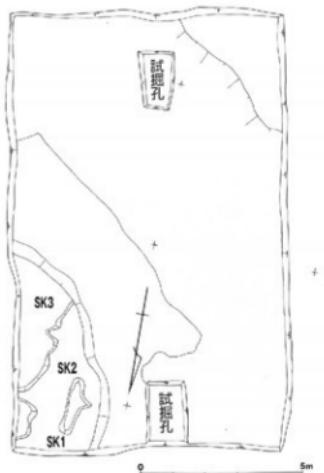


fig. 453 調査区平面図



fig. 454 調査区全景

自然流路 自然流路は、調査区の中央を斜めに横切るように存在している。幅は約8mあり、勾配から考えて、調査区の北西隅から南東隅に向かって流れていたものと考えられる。深さは下層が未掘のため不明である。流路は遺構の存在する⑬層：黄褐色砂礫（試掘：黄灰色粘砂）上に存在していること、埋土から布留式土器と考えられる遺物が出土していることから、遺構と同時期の古墳時代前期に存在していたものと考えられる。

土坑 遺構は自然流路の北東肩に当たる位置、地山である⑬層：黄褐色砂礫（試掘：黄灰色粘砂）を切り込む形で検出した。SK1～3いずれも不整形の土坑で、埋土は⑩層：暗茶褐色混礫土および⑨層：濃茶褐色混礫土であった。SK1、3から布留式土器と考えられる破片が数点出土している。

出土遺物 遺物は各包含層と自然流路、遺構内から出土している。総量は約コンテナー1箱分である。全体を通じ残存状態はよくない。復元実測が可能なものを図示した。以下のとおりである。

⑧層：淡灰褐色粘質土（試掘：淡灰褐色砂質シルト）出土遺物

（1：格子目叩平瓦、2：無紋青磁碗、4：土師質土器羽釜、3：瀬戸鉢皿、5、6、7、8、9：土師質土器壙、10：土師質土器焰塔、11：土師質土器壺、12：瓦質平瓦）

⑩層：茶灰褐色粘質土（試掘：灰褐色砂質シルト）出土遺物

（13：白磁碗、14：土師質土器壙、15、16：東播系須恵器捏鉢、17：東播系須恵器壺）

⑪層：灰色粘質土（試掘：灰色シルト）出土遺物

（18：布留式土器壘、19：格子目叩平瓦、20：土師質土器壙、21：土師質土器羽釜、24、25：東播系須恵器碗、22：東播系須恵器捏鉢、23：東播系須恵器壺、26、27：東播系須恵器壺）

出土遺物の土器組成は、土師質土器皿などの供膳形態は少なく、壙、羽釜、捏鉢などの

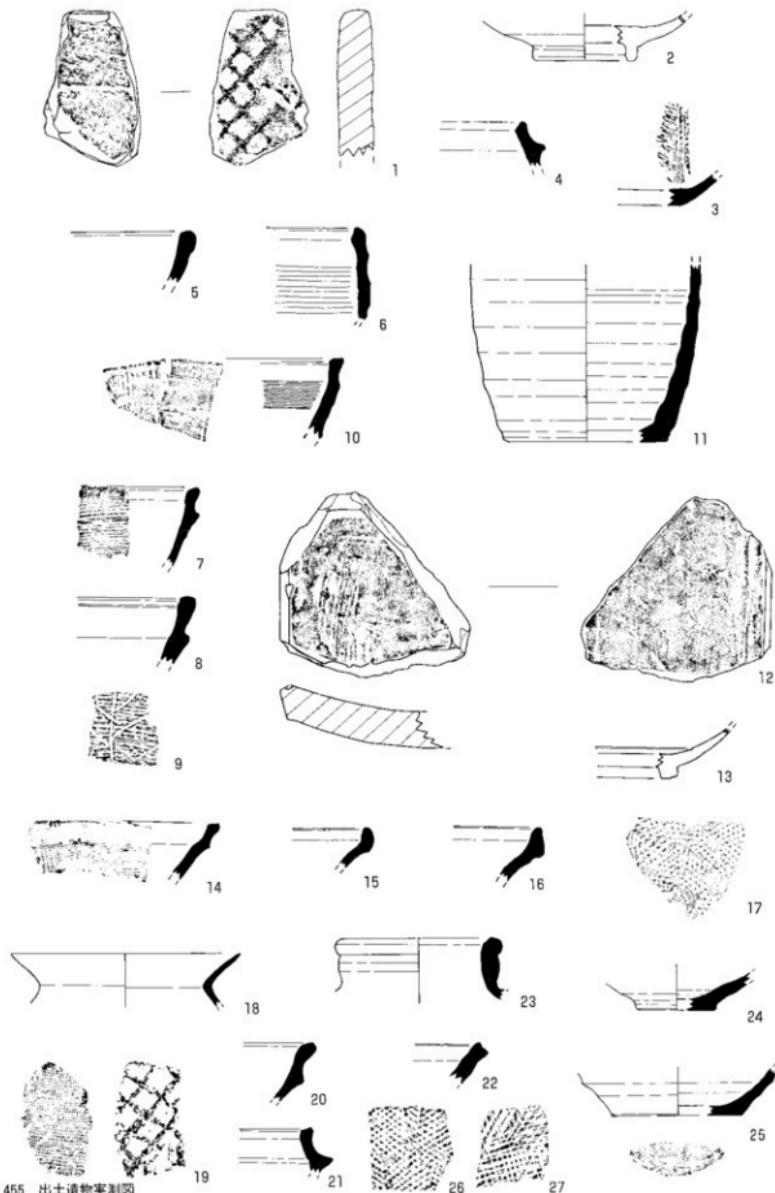
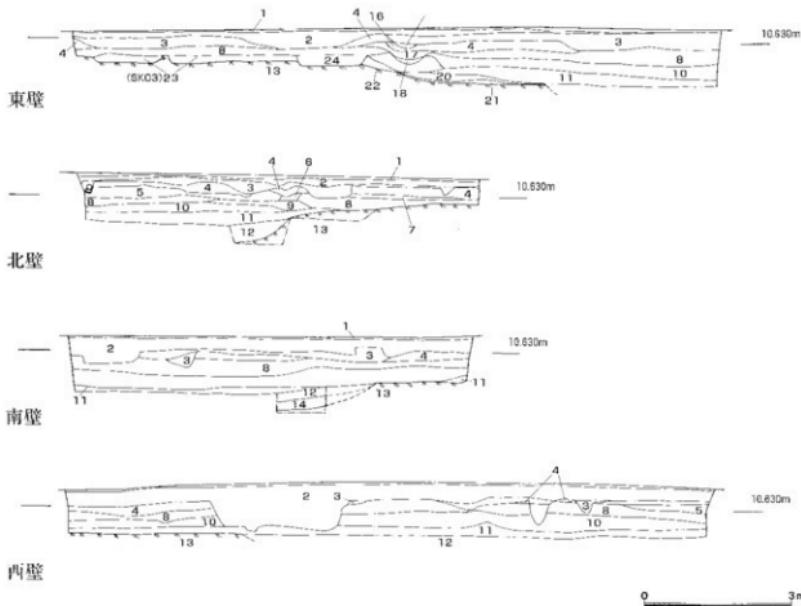


fig. 455 出土遺物実測図

煮沸・調理形態が多数を占めていた。また、これら土器の型式からみた年代により、これら包含層が、各々⑥層：15世紀代、⑩層：14世紀代、⑪層：13世紀代の堆積であることがわかった。

3. まとめ 今回の調査では、戦国時代、中世、古代～古墳時代前期の包含層、古墳時代前期の自然流路と遺構を検出した。各時代の包含層は調査区内に平行堆積していた。特に灰色粘土層からは古代の平瓦が出土しており、近辺に古代寺院が存在する可能性がある。また、調査区を斜めに横切る自然流路は、勾配からみて北から南に向かって流れているものと考えられる。古墳時代の遺構は検出状況から判断して、流路の東西両肩に展開しているものと考えられる。



- | | |
|----------------|-------------|
| 1. アスファルト | 14. 白色砂礫 |
| 2. 盛土 | 15. 暗黄灰色土 |
| 3. 墓室 | 16. 灰色粘土 |
| 4. 黄褐色土 | 17. 暗黃色土 |
| (試掘：黄褐色シルト) | 18. 暗灰褐色砂礫 |
| 5. 純灰色砂質土 | 19. 暗黄灰色砂質土 |
| (試掘：純灰色砂質シルト) | 20. 暗灰白色砂 |
| 6. 灰色細砂 | 21. 淡緑灰色砂 |
| 7. 灰色粗砂 | 22. 黒灰色砂 |
| 8. 淡灰褐色粘土質 | 23. 暗系褐色泥炭土 |
| (試掘：淡灰褐色砂質シルト) | 24. 濃系褐色泥炭土 |
| 9. 黄褐色砂土 | SK03内理土 |
| (試掘：黄褐色砂質シルト) | |
| 10. 淡灰褐色粘土質 | |
| (試掘：灰褐色砂質シルト) | |
| 11. 灰色粘土質 | |
| (試掘：灰色シルト) | |
| 12. 黑色粘土 | |
| (試掘：黒黄色砂質土) | |
| 13. 黄褐色砂礫 | |
| (試掘：黄灰色砂礫) | |

fig. 456 調査区断面図

ふたつや 62. 二ツ屋遺跡 第6次調査

1. はじめに

今回の調査は、兵庫県阪神・淡路大震災の復興に伴う開発により、玉津二ツ屋遺跡の範囲内において共同住宅の建設が計画されたため行われたものである。当遺跡の一部は既に1992・1993年度に神戸市教育委員会によって発掘調査が行われており、弥生時代～古墳時代の溝、平安時代末の邸宅などが確認されている。今回の調査地はそれらの遺構に近接しており、関連遺構が検出できる可能性が想定された。調査は、遺構破壊の恐れのある建設予定建物の基礎部分の範囲について行った。



2. 調査の概要

平安時代末の邸宅跡が確認された1992年度調査の4・5区の北西に隣接し、北東には1993年度調査の第6区があり、西を丘陵で囲まれた地区である。幅2.5mの2本の平行した南北方向のトレンチの調査を行い、東側のそれを東トレンチ（長さ36m）、西側のそれを西トレンチ（長さ32m）と呼ぶ。

I 区

基本層序

基本層序は、造成前の旧地表の上にある厚さ80cmの盛土を除いて、上から第1層（現代耕土）、第2層（旧耕土）、第3層（旧耕土）、第4層（堆積層）、第5層（堆積層）の順であり、第4層上面が第1遺構面、第5層上面が第2遺構面となっている。これは、1993年度第6区と同様である。ただ、西トレントでは丘陵側に近いため、第4層が欠落しており、第5層上面で上層遺構と下層遺構の双方が検出できた。

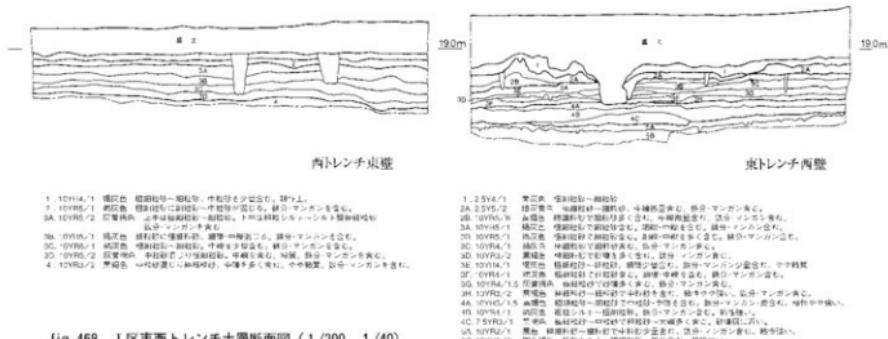


fig. 468 I 区東西トレント土層断面図 (1/200, 1/40)

上層遺構

S D01

遺構は、西トレントでのみ確認できた。上層遺構は、溝5条とピット3基がある。

トレンチ北端で検出した南北方向の溝である。幅40cm、深さ10cm。底は丸く、埋土は黒褐色砂質土で南に向かって低く流れる。溝の南端はS D02、S D03上層と合流する。遺物は東播系須恵器と土師器の小破片が少量出土した。

S D02

トレンチ北端で検出した、S D01と平行して流れる南北方向の溝である。幅40cm、深さ5cm。埋土は黒褐色砂質土で南に向かって低く流れる。溝の南端はS D01、S D03上層と合流する。遺物は、東播系須恵器と土師器の小破片がごく少量出土した。

S D03

トレンチのほぼ全域で検出できた、蛇行しながら南に向かって低く流れる南北方向の溝である。上層と下層に分けられ、それぞれ若干流れの位置が異なる。下層は東に張り出す弧を描いて流れる溝で、幅30cm、深さ25cmである。黒褐色砂質土の埋土には小型の円礫が多く混じる。上層は西に張り出す弧を描いて流れる溝で、幅90cm、深さ10cmである。埋土は黒褐色砂質土で、溝の北端ではS D01、S D02に繋がっている。遺物は、下層溝から東播系須恵器、土師器が多く出土し、瓦も少量出土した。瓦質土器片、白磁片もそれぞれ1点ずつ出土した。東播系須恵器は楕と小皿が主体を成し、片口鉢、壺、壺も少量ある。土師器は小皿が主体を成し、土釜も少量ある。これらには若干の型式的新古が認められるが、いずれも12世紀代の所産と考えられるものである。また、古墳時代後期の須恵器杯、平瓶、壺、土師器高杯の小破片が混入して出土した。

S D04

トレンチ北半で検出した、S D03下層と平行して南に向かって低く流れる南北溝である。幅40cm、深さ5cm。埋土は黒褐色砂質土で、12世紀代の土師器小皿や壺の破片が少量出土した。

S D05

トレンチ南端で検出した、蛇行しながら南に向かって低く流れる南北方向の溝である。



fig. 459 I 区西トレンチ上層全景



fig. 460 I 区西トレンチ下層全景

幅50cm、深さ20cm。埋土は黒褐色粘質土。遺物は、東播系須恵器の碗、小皿、土師器の壺、小皿の破片が多く出土した。瓦質土器の片口鉢の破片も出土した。いずれも12世紀代のものと考えられる。

ピット 3基いずれもトレンチ中央で検出した。SD03に先行する。平面形はいずれも円形で、直径はP01が20cm、P02が30cm、P03が40cmである。特にP02では中に拳大の円窓を詰めており、柱基礎の根固め石の状況を呈する。遺物は、P01とP03から東播系須恵器の小破片が1点ずつ出土し、P02からは平瓦と製塩土器と思われる破片がそれぞれ1点出土した。

下層遺構

SD06 トレンチのほぼ全域にわたって検出できた、蛇行しながら南に向かって低く流れる南北方向の溝である。幅1m、深さ20cm。底は丸く、埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

出土遺物 上層遺構、特にSD03から多くの遺物が出土したが、図化可能程度に遺存した個体は少ない。以下、図示した遺物について述べる。

- SD03**
 - 1~3; 東播系須恵器小皿。いずれも口径8.5cmで、糸切り底をもつ。
 - 4; 東播系須恵器碗。底径5.6cmで、糸切り底をもつ。
 - 5; 東播系須恵器壺。底径10.5cm。底部の粘土円盤が剥離している。
 - 6; 東播系須恵器片口鉢。口縁端部をわずかに水平方向につまみ出す。
 - 7・8; 土師器小皿。7は口径8cm、器高1.4cm。8は口径8.5cm、器高1cm。いずれも糸切り底をもつ。
 - 16; 平瓦。凸面に縄目叩き、凹面に布目が残る。凸面に自然釉がかかる。器厚1.7~2cm。
 - 17; 平瓦。凸面、凹面ともにナデ。端面は未調整。器厚1.4~1.7cm。
- SD04** 9; 土師器小皿。口径9cm、器高1.5cm。糸切り底をもつ。
- SD05** 10; 土師器小皿。口径9cm、器高1.7cm。糸切り底をもつ。
- P02** 18; 平瓦。凸面に縄目叩き、凹面に布目が残る。破面には粘土帯を接合する際に接合面に付けられたキズが確認できる。器厚2.2cm。

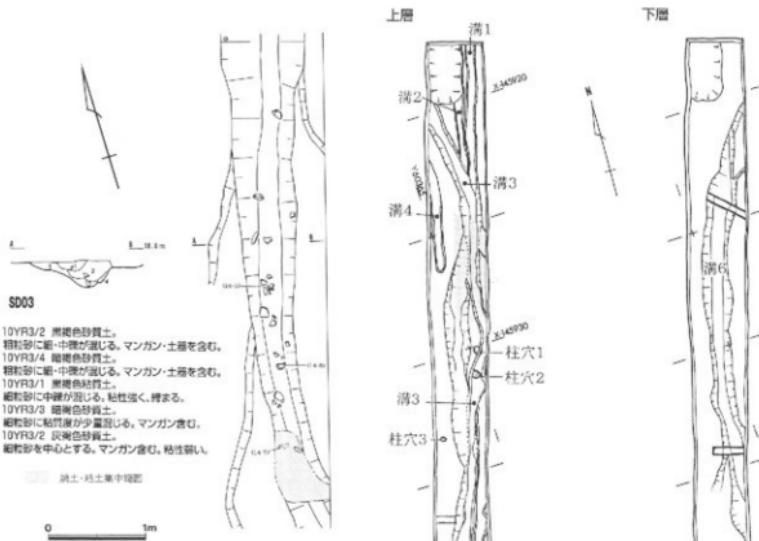


fig. 462 溝3遺物出土状況平面図・断面図

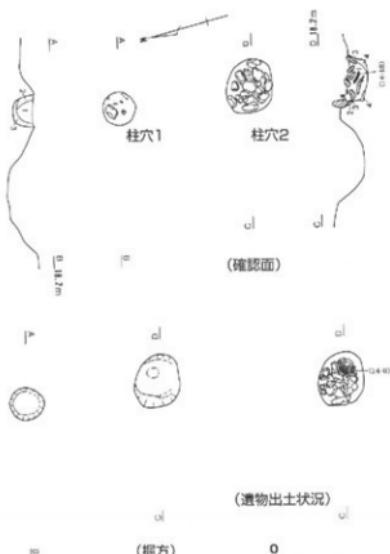


fig. 463 柱穴1・2平面図・断面図

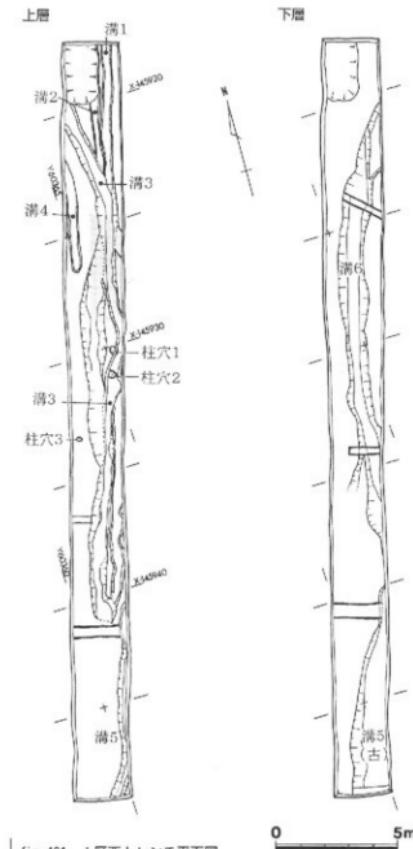


fig. 461 I区西トレンチ平面図



fig. 464 柱穴2遺物出土状況

第3層 11・12；須恵器東播系須恵器片口鉢。11は口縁端部を上方及び水平方向にわずかにつまみ出すのに対し、12は上方と下方につまみ出し、外面に面をもつ口縁を作る。12のほうが時期的に下るものである。

小 結 南東に隣接する1992年度4・5区の邸宅跡に関連する遺構が期待されたが、邸宅跡に最も近接する東トレンチでは全く遺構が確認されず、西トレンチで若干の南北溝、ピットが検出できたのみであった。溝から出土した土器は邸宅跡と同じ12世紀代のものであることから、それらの溝は邸宅の西側を丘陵と画す意味をもつものと考えられ、東トレンチの位置する邸宅跡と溝の間の空間は空き地として利用されていたと想定できる。また、13世紀に下る遺物（12）もあり、その時期まで生活の痕跡は残る。

古墳時代後期の遺物も若干混入していたが、これらは西側の丘陵上に当該期の遺跡が存在する可能性を示してくれるものである。

II 区 位 置 北側を1993年度調査の第15区トレンチ、東側を同第16区トレンチで囲まれた地区である。幅2mの2本の平行した東西方向のトレンチの調査を行い、北側のそれを北トレンチ（長さ25.7m）、南側のそれを南トレンチ（長さ22.5m）と呼ぶ。

基本層序 基本層序は、造成前の旧地表の上にある厚さ70cmの盛土を除いて、上から第1層（現代耕土）、第2層（旧耕土）、第3層（旧耕土）、第4層（堆積層）、第5層（堆積層）の順であり、第4層上面が第1遺構面、第5層上面が第2遺構面となっている。これは、1993年度調査第15・16区と同様である。

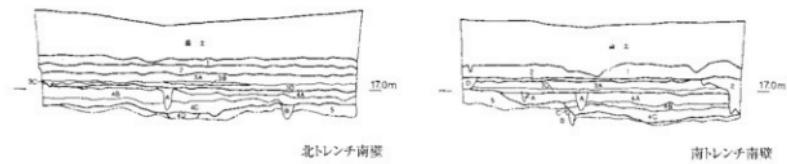


fig. 465 II区南北トレンチ土層断面図(1/200, 1/40)

第1遺構面 第1遺構面で検出した遺構は、溝2条とピット2基である。

S D01 南・北トレンチにまたがって検出できた南北方向の溝である。幅60cm、深さ20cm、底は丸く、埋土は褐灰色粘質土で、南に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。1993年度の調査成果から、古代～中世のものと考えられる。

S D02 南トレンチで検出した東西方向の溝である。この溝はS D01とは異なり、第4層上面から掘り込まれたものではなく、第2層の旧耕土の一部が水路として深く掘られたものであり、第3層を切り込んで掘られている。幅80cm、深さ15cmで、底は丸く、溝の南側にそっ

	北トレンチ南壁
1. 2.5Y4/1	黄褐色、細緻粒状～細粒砂。
2. 2.5Y3/2	黄褐色、細粒砂、地盤中に砂利混在。中層～低層少々黒色混じる。やや細粒。
3A. 2.5Y3/4	黄褐色、細粒砂、地盤中に砂利混在。少々、黒色～茶色混じる。やや細粒。
3B. 2.5Y3/5	黄褐色、細粒砂状～細粒沙泥状じる。少々、マングン含む。やや粗粒。
3C. 2.5Y3/7	黄褐色、細粒砂状～細粒沙泥状じる。少々、マングン含む。やや粗粒。
4D. 2.5Y3/8	黄褐色、細粒砂状～細粒沙泥状じる。少々、マングン含む。やや粗粒。
4E. 2.5Y3/9	黄褐色、細粒砂状～細粒沙泥状じる。少々、マングン含む。やや粗粒。
4F. 2.5Y3/10	黄褐色、細粒砂状～細粒沙泥状じる。少々、マングン含む。やや粗粒。
4G. 10Y9/4	褐色化して発達した砂利層。地盤～インゴット灰、粘土。
4H. 10Y9/5	褐色化して発達した砂利層。地盤～インゴット灰、粘土。
4I. 10Y9/6	褐色化して発達した砂利層。地盤～インゴット灰、粘土。
4J. 10Y9/7	褐色化して発達した砂利層。地盤～インゴット灰、粘土。
5. 10Y9/2/3	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。
6. 10Y9/4	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
7. 10Y9/5	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
8. 10Y9/6	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
A. 7.5Y9/3	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
B. 7.5Y9/5	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。

1. 2.5Y4/1	黄褐色、細粒砂～細粒砂。
2. 2.5Y3/2	黄褐色、細粒砂、地盤中に砂利混在。中層～低層少々黒色混じる。やや細粒。
3A. 2.5Y3/4	黄褐色、細粒砂、地盤中に砂利混在。少々、マングン含む。やや細粒。
3B. 2.5Y3/5	黄褐色、細粒砂状～細粒沙泥状じる。少々、マングン含む。やや粗粒。
3C. 2.5Y3/7	黄褐色、細粒砂状～細粒沙泥状じる。少々、マングン含む。やや粗粒。
4A. 7.5Y4/1	黄褐色、細粒砂～細粒砂。
4B. 10Y9/4	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
4C. 10Y9/5	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
4D. 10Y9/6	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
4E. 10Y9/7	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
5. 10Y9/2/3	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。
6. 10Y9/4	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
7. 10Y9/5	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
8. 10Y9/6	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
C. 7.5Y9/3	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。
D. 7.5Y9/5	褐色化して砂利層で埋め尽く～半埋立。部分、マングン含む。粘土。

て護岸の杭が打たれたビットが認められる。遺物は出土しなかった。

ビット 南トレンチで2基検出できたが、いずれも深さ10cm未満の浅いものである。

第2遺構面 第2遺構面で検出した遺構は、溝2条と土坑1基である。その他、第4層が第5層を削り込んで深く窪んだ部分は浅い流路状を呈する。これらの遺構は、1993年度の調査成果から、弥生～古墳時代のものと思われる。

S D101 南・北トレンチにまたがって検出できた北西～南東方向の溝である。幅50cm、深さ10cm、底は丸く、埋土は黒褐色粘質土で南東に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。

S D102 南トレンチで検出できた南北方向の細い溝である。幅20cm、深さ5cm、底は丸く、埋土は褐灰色粗砂で、南に向かって低く掘られる。一部がS D101と重複する土層断面の観察から、S D101が先行して掘られたことが明らかである。遺物は出土しなかった。

S K103 北トレンチで検出できた長軸が北西～南東方向の楕円形の浅い土坑である。長径1m、短径60cm、深さ20cm、埋土は黒褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。



fig. 466 II区南トレンチ南壁



fig. 467 II区南トレンチ第2遺構面全景

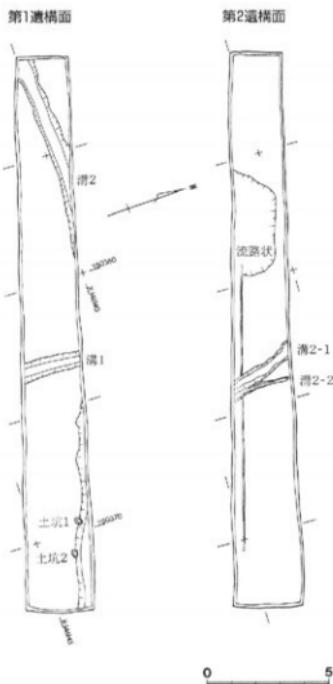


fig. 468 II区南トレンチ平面図

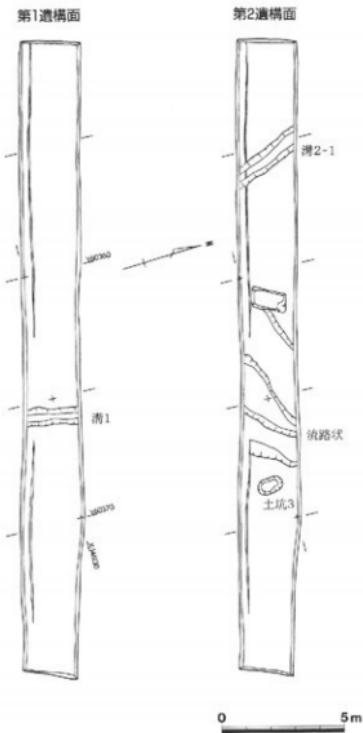


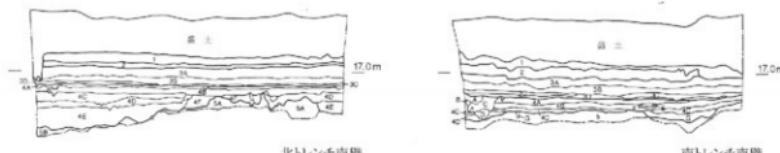
fig. 469 II 北トレンチ平面図

出土遺物 第2層に混入した弥生土器の壺の破片が2点出土した。そのうち1点(13)は底部の破片で、体部外面に叩き痕が残り、底外面には木葉痕が付けられている。底径5.5cm、残存高3.5cm。

小 結 第1遺構面、第2遺構面ともに溝などの遺構が検出できた。これらによって、2面の遺構面をもつという1993年度の調査成果を追認することができた。

III 区位 東側を1993年度調査の第16区南トレンチ、西側を同第1区南トレンチに挟まれた地区である。幅2mの2本の平行した東西方向のトレンチの調査を行い、北側のそれを北トレンチ(長さ25m)、南側のそれを南トレンチ(長さ23m)と呼ぶ。

基本層序 基本層序は、造成前の旧地表の上にある厚さ70cmの盛土を除いて、上から第1層(現代耕土)、第2層(旧耕土)、第3層(旧耕土)、第4層(堆積層)、第5層(堆積層)の順であり、第4層上面が第1遺構面、第5層上面が第2遺構面となっている。これは、1993年度第1区南・第16区南と同様である。ただ、北トレンチ東半では、第4層と第5層の間にもう一層認められる。



北トレント南壁

fig. 472 III区南北トレンチ土層断面図 (1/200, 1/40)

第1遺構面 第1遺構面で検出した遺構は、溝1条のみである。

S D03 南トレンチの東端で検出できた南北方向の溝である。幅80~160cm、深さ20cm。底は比較的平たく、埋土は黄灰色砂質土で、南に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。

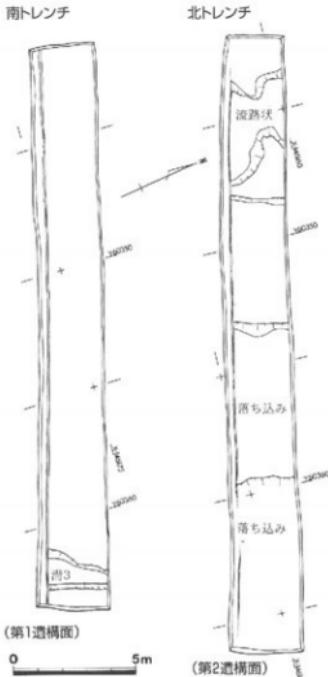


fig. 473 三区南北トレンチ断面図



fig. 474 III区南トレンチ第1遺構面全景



fig. 475 開區北トレンチ第2邊縁面全景

1993年度の調査成果から、古代～中世のものと考えられる。IV区のS D03に連続する溝と思われる。

第2遺構面 第2遺構面では明確な遺構は検出できなかった。ただ、第4層が第5層を削り込んで深く窪んだ部分がトレント全体に見られ、浅い流路状を呈する。

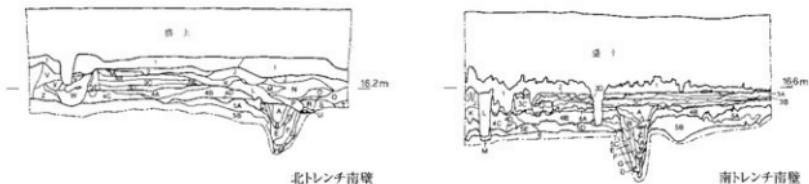
出土遺物 第3層から、東播系須恵器、土師器等の破片が若干出土した他に、瓦、信楽焼擂鉢、青磁の小破片が各1点出土した。

第4層から、弥生時代後期～庄内期の壺、甕、高杯等の破片が若干出土した。その中で、図化可能な破片に有孔鉢の底部の破片がある(14)。孔は焼成前に底部の一か所に内外両面から穿孔される。

小 結 S D03を除いて明確な遺構は確認できなかったが、層中の出土遺物から、第1遺構面の遺構は中世以前、第2遺構面は弥生後期以前のものであって、第4層がそれ以後中世に至るまでに形成された層であることが明らかになった。

IV 区位 1993年度調査の第1区南トレントの東側に隣接する地区である。2本の平行した東西方向のトレントの調査を行い、北側のそれを北トレント、南側のそれを南トレントと呼ぶ。北トレントは幅2.5m、長さ25m。南トレントは扇状に掘削し、幅2.5～7.5m、長さ27mである。

基本層序 基本層序は、造成前の旧地表の上にある厚さ1mの盛土を除いて、上から第1層(現代耕土)、第2層(旧耕土)、第3層(旧耕土)、第4層(堆積層)、第5層(堆積層)の順であり、第4層上面が第1遺構面、第5層上面が第2遺構面となっている。これは、1993年度第1区南と同様である。



- 第1遺構面** 第1遺構面で検出した遺構は、溝8条、土坑2基等がある。
- S D01** 南トレンチの北西隅で検出できた北東—南西方向の溝である。幅40cm、深さ20cm。底は比較的平たく、埋土は褐灰色粘質土で、南に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。
- S D02** 南北両トレンチで検出できた北東—南西方向の溝である。幅2.5m、深さ1.1m。斜面は傾斜角45°以上の急角度で掘り込まれる。底は丸いが、最も深い部分では幅20cmの平らな面を持つ。埋土は大きく上、中、下の3層に分かれ。下層は最初に溝が開削されて機能していた際に堆積した層で、灰色系の砂、砂質土、粘質土が互層をなし、溝の半分以上の深さが埋没している。中層は溝を掘りなおした後に堆積、埋め戻された層で、黄褐色粘質土ブロックを多く含むことが特徴である。層の幅、深さ共に最初に開削された規模よりも小さい。上層は溝が埋められた後に堆積した層で、灰白色粘質土である。埋土の陥没によるため、溝中心付近では堆積が厚い。溝は南に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。
- S D03** 南北両トレンチの東よりで検出できた南北方向の溝である。幅80cm、深さ20cm。底は比較的平たく、埋土は褐灰色粘質土で、南に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。
- S D04** 南北両トレンチの東より、SD03の東側で検出できた南北方向の溝である。幅60cm、深さ20cm。底は比較的平たく、埋土は褐灰色粘質土で、南に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。
- S D05** 南北両トレンチの東より、SD04の東側で検出できた南北方向の溝である。幅80cm、深さ20cm。底は比較的平たく、埋土は褐灰色粘質土で、南に向かって低く掘られる。遺物は出土しなかった。
- S D06** 南北両トレンチの東より、SD05の東側で検出できた南北方向の溝である。幅70cm、深さ20cm。底は比較的平たく、埋土は褐灰色粘質土で、南に向かって低く掘られる。遺物は土師器小皿の底部の破片が1点出土した。
- 水路01** 南トレンチの南西隅で検出できた東西方向の水路である。この水路は第2層上面から掘



fig. 477
IV区南トレンチ溝2

り込まれており、第4層上面で検出した他の遺構とは時期を異にする。幅1.5m以上、深さ60cm。底は平たく、埋土は暗灰黄色砂質土。遺物は近代の磁器片が少量出土した。

水路02 南北両トレンチの東端で検出できた南北方向の水路である。水路01と同様に第2層上面から掘り込まれており、埋土の状況も似ることから、この水路は水路01に接続するものと考えられる。幅3m以上、深さ60cmで、底は平たい。遺物は近代の陶磁器片が少量出土した他、東播系須恵器や瓦の破片が少量混入して出土した。

SK01 北トレンチの西よりで検出できた不整形の土坑である。半分はトレンチ外へ続く。径1.2m、深さ10cm。底は平たく、埋土は灰白色粘質土。遺物は土師器小破片が1点出土した。

SK02 SK01の西側に接して検出できた円形の土坑である。直径50cm、深さ5cm。底は丸く、埋土は灰白色粘質土。遺物は出土しなかった。

その他 北トレンチの東端で2基の直径1mの円形の野溜状遺構が検出された。いずれも樋棒板が抜き取られて、最下段の竹製の柵が遺存している状況である。これらは水路02埋土を切り込んで掘られていることから、近代以降の遺構である。遺物は磁器の小片が1点出土した。

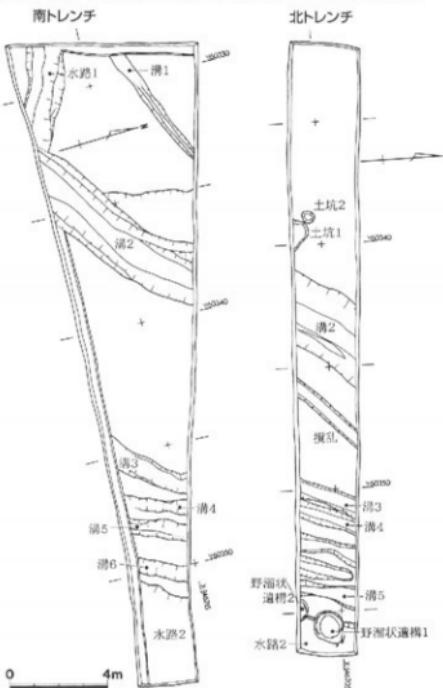
第2遺構面 第2遺構面では明確な遺構は検出できなかった。ただ、第4層が第5層を削り込んで深



fig. 478 IV区南トレンチ全景



fig. 479 IV区北トレンチ全景



く窪んだ部分がトレンチ全体に見られ、浅い流路状を呈する。

出土遺物 第3層から、古墳時代の須恵器の高杯蓋、器台や布留期の土師器壺の破片が若干出土した他、東播系須恵器の小破片も出土した。

第4層から、古墳時代の土師器の破片が少量出土した。その中で、図化可能な破片に庄内期瀬戸内系甕と思われるものがある(15)。頸部から屈曲して開く口縁の端部は上方につまみ出される。調整等は器面が磨耗しており観察できない。

小 結 第1造構面で検出したSD01、SD03~06、SK01・02はいずれも同質の埋土であることから、同時期に機能していたものであり、出土遺物から平安~中世のものと考えられる。また、SD02は、上層埋土がそれらと同質の埋土であることから、時期の下限をそれ以前に置くことができる。開削時期は、SD02のベースとなる第4層から庄内期の土師器が出土していることから、それ以降と/orすることができる。

また、第3層から古墳時代の遺物が若干出土していることから、第4層の形成が古墳時代まで継続しており、その高さまでは削平を受けているか、若しくは、付近に古墳時代の造構が存在する可能性が考えられる。

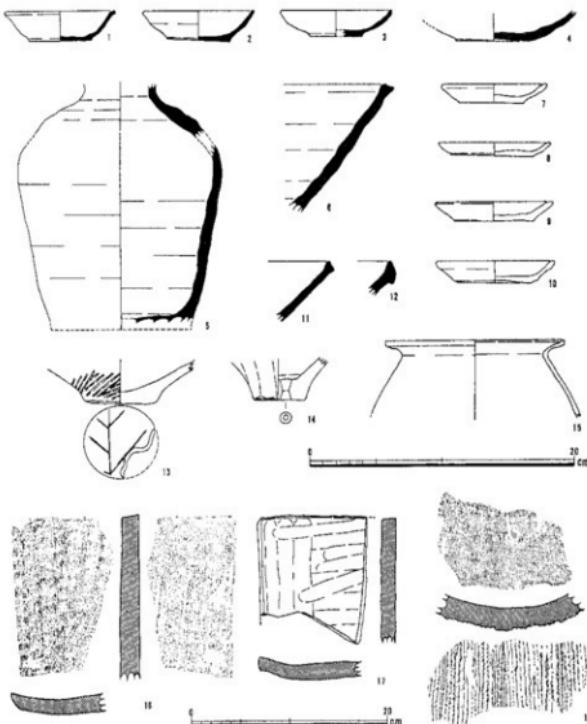


fig. 481
出土遺物実測図

にちりんじ 63. 日輪寺遺跡 第4次調査

1. はじめに

日輪寺遺跡は、神戸市西区玉津町に所在する弥生から中世に及ぶ複合遺跡である。遺跡は西の明石川、東の櫛谷川に挟まれた標高30m程の舌状台地上南端に位置する。ここに阪神・淡路大震災復興事業に伴う住宅供給事業が計画された。この事業に伴い、工事による掘削によって影響が及ぶ部分の発掘調査を実施した。第4次調査の調査区は、地質的には更新世初期の大坂層群、下部亜層群によって形成された段丘上にある。

日輪寺遺跡では過去3回の発掘調査が行われている。本調査区は、平成8年度の第3次調査地東側に当たる。第3次調査では弥生時代後期の竪穴住居、掘立柱建物と中世の築地状遺構が検出された。また平成5年度の日輪寺調査団による第1次調査では、円礫を敷いて鉄、鍬先、銅錢を埋納した祭祀土坑が発見された。このように日輪寺遺跡は中世の日輪寺関連遺構が注目されていたが、その下層に弥生時代後期の遺構が存在することが明らかになっていた。



fig. 482
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査区は畠地として利用されていた。しかし土器片がすぐに表採できる状況で、周囲の試掘や調査からも現耕作土直下が遺構面となっていて、深さも非常に浅いことが想定された。このため調査は工事区域ほぼ全面にわたることになった。

現耕作土・造成土を重機で除去したところ、調査区全面にわたって搅乱が入り、遺構が大幅に破壊されていることが判明した。この搅乱内からは1981年製のコーヒー缶が出土した。調査区南端と北端は地形に沿って下がり、南端では包含層上に中世遺構面が確認できた。それ以外の部分、つまり調査区の大半は現代までの削平のため地山直上で遺構を確認するに止まった。

このような破壊にも関わらず、遺構の残りは良好であった。検出した遺構は弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居20軒、中世の掘立柱建物4棟、弥生時代から中世までの土坑18基、中世の集石など4基、柱穴190本である。その他に土器溜り、風倒木が存在した。

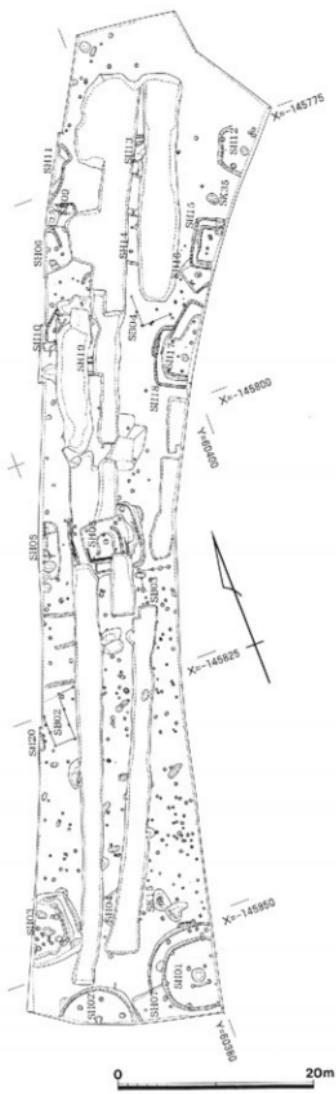


fig. 483 調査区遺構平面図

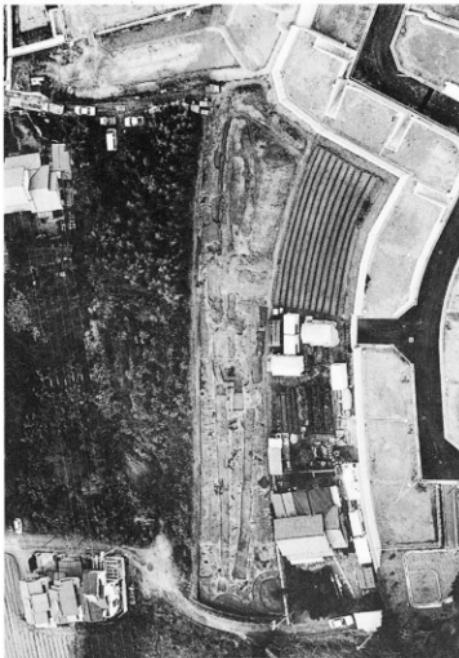


fig. 484 遺構面垂直写真



fig. 485 調査区遠景

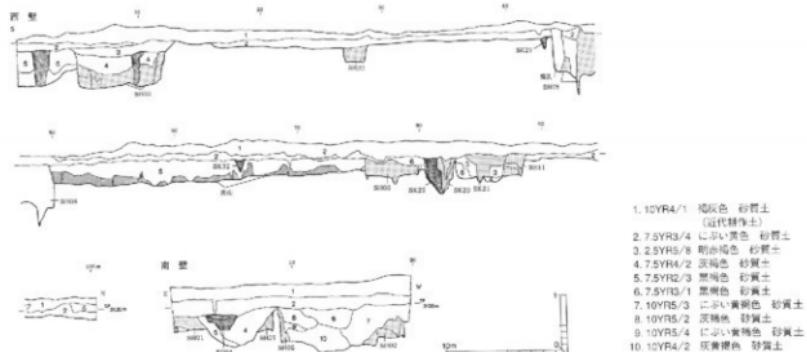


fig. 486 基本土壤図

基本層序

調査区の西壁と南壁の基本上層図を示す。1層は耕作土と造成土で、2層が中世以降の包含層である。5層は弥生時代後期以降の基盤層であるが、この層が存在せずすぐに地山となっている部分のほうが多い。

検出遺構

以下に確認した遺構各個の概要を述べる。

SH01

調査区南東端に位置する。南東側約3分の1が調査区外にあたる。形状は円形で、ベッド状遺構を有する。中央穴の上面は隅丸方形で、最下層が円形の3段掘りになっている。外周東から南にかけて、粘土が帶状に残存している。粘土は黄色で、幅10cm、厚さ3cmを測り、被熱が認められる。埋土は外縁部に炭層が厚さ3cm残っていたが、中央には存在しない。

柱穴はベッド下の壁体溝内に5本確認でき、復元すると7本かと思われる。南東隅のものは他と比べて浅く、その周りの壁体溝は柱穴を避けて内側に回る。

また、中央穴周りに4本の柱穴が存在し、それらの掘形は中央に傾いている。建築時にそうであったか、抜き取り跡かどうかは判断できない。中央穴周りの粘土は柱穴埋土上には見られなかった。柱穴の埋土は1層で、置き土は見られない。

床面上には、被熱部分と溝が存在する。被熱部分は中央穴南で幅0.7m、長さ1.7m以上にわたって帯状に見られる。溝は直線で1条、長さは2.9mにわたる。

埋土は、主に最下層で初期埋土の灰褐色粘質土（土層図c-c'の13層）、その上層のに深い赤褐色粘質土（土層図c-c'の12層）の2種類で構成される。に深い赤褐色粘質土が自然堆積ではないように見受けられ、灰褐色粘質土が堆積した後にぐい赤褐色粘質土できれいに埋めたと考えられる。

遺物は埋土中と床面で土器片を検出している。床面では土器片が少量存在するが、意図的と思われるにはベッド上の高杯部だけである。図中、1から4で、うち1と4は埋土中、2・3は柱穴から出土した。また図示できなかったが、中央穴埋土中から水洗により炭化米、サヌカイト剝片が出土している。

この住居は、出土した土器から庄内式前半併行期に相当すると考えられる。

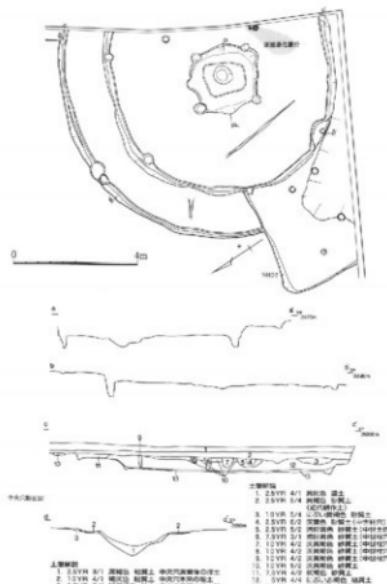


fig. 487 SH01平面図・断面図

S H02 調査区南端に位置し、南側半分が調査区外である。形状は円形である。

住居中央部から東側にかけて、上層に土器溜りがみられた。土器溜りの内最も新しい土器は古墳時代前期に位置づけられる。

床面の中央付近は上層包含層によって削られているものと思われる。中央穴も痕跡しか残っていない。柱穴は3本と中央穴近くに1本を確認し、復元すると6本かと思われる。柱穴の埋土は1層、置き土は見られなかった。

埋土はSH01と同様、明赤褐色土（土層図の3層）で埋め直していた。この赤色土は包含層のため壁面付近でのみ確認できた。

出土遺物は土器片が床面・埋土中に見られた。図中、5は上層の土器溜りに見られたもので、古墳時代前期に相当する高杯脚部である。6は床面出土である。

この住居の時期はSH01と同じく庄内式前半併行期と考えられる。埋め直していることよりSH01と同時存在の可能性もある。

S H03 調査区南西に位置し、約3分の1が調査区外である。形状は隅丸方形で、ベッド状遺構を持つ。

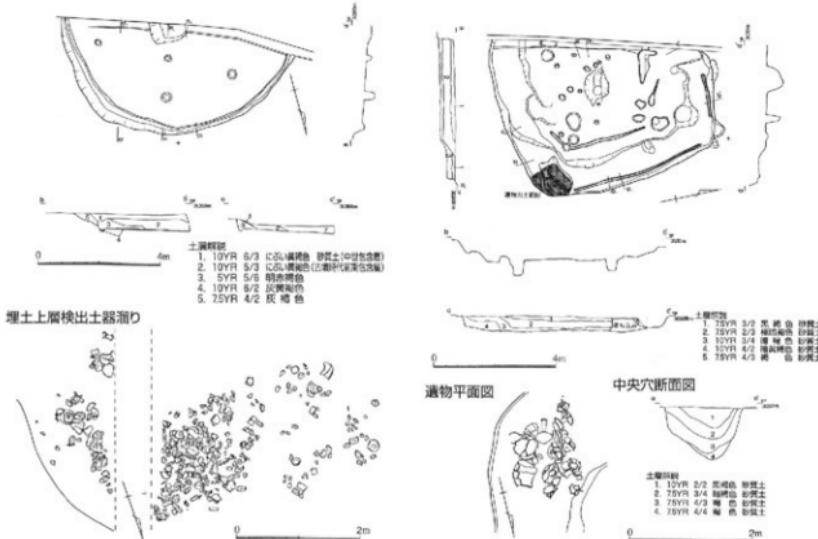
中央穴は楕円形で、埋土は炭化物を含む黒褐～暗褐色砂質土である。主柱穴は3本を確認し、復元すると4本であろう。柱穴の埋土は單一層である。中央穴周囲の柱穴は使用されたかどうか不明である。貼り床はベッド部分に厚く存在した（土層図c-c'の4層）。壁体溝はベッド上段・下段で存在するが平面では一部未確認の所もある。

南東隅土器溜りは、ベッド南東隅に存在し、住居検出時にすでに露出していた。下層に土坑1基がある。土器溜りとSH03が別遺構かどうかは平面では判断できなかった。

埋土には多くの土器が床面近くの深さまで見られた。このことから住居の廃棄後はすぐに土器溜りとなっていたようである。

出土遺物は、埋土中と上層包含層から多くの土器が出土したが、床面からは確認できなかった。7から13は良好な一括資料である南東隅土器溜りの土器群である。完形に近い土器が多く、復元できた個体数は高杯6個、細頸直口壺1個、その他、壺2個、甕2個、鉢2個である。9の高杯、14の鉢については類似するものが2個体ずつ存在した。

この住居の時期は、住居とそれほど違わない時期と考えられる南東隅土器溜りから、庄内式後半併行期と思われる。



SH04 調査区南端に位置し、東と西を現代の搅乱で切られる。形状は方形である。中央穴・柱穴・壁体溝は確認できなかった。

出土遺物は土器片で完形品ではなく、15・16等が床面からやや浮いた状態で検出された。時期はおそらく弥生時代後期～庄内式併行期と考えられる。

SH05 調査区はほぼ中央部に位置し、この住居と切り合う住居は存在しない。東西に2ヶ所、住居を横断して現代の搅乱が入っている。形状は方形で、ベッド状遺構を持つ。

中央穴は上面が直径1.4mの円形で、外側に輪状の土手（幅25cm）を地山削りだしで構築する。土手の内側は $0.75 \times 0.6m$ の楕円形である。土手上から底面までの深さは0.55mを測る。断面観察では2層が焼土面であることから、最終使用時以前に最低でも1回の造り替えがあることがわかっている。主柱穴は4本確認した。直径は検出面で20～30cm、深さは40cm程度である。埋土は単一層である。

床面では、貼り床は確認できなかった。中央穴東側に存在し主柱穴より内側へ入る溝は仕切溝と考えている。壁体溝内には杭痕跡らしい溝みが観察できる部分が見られる。

埋土は3層に分かれる。最上層は包含層で古墳時代前期の土器を含む。

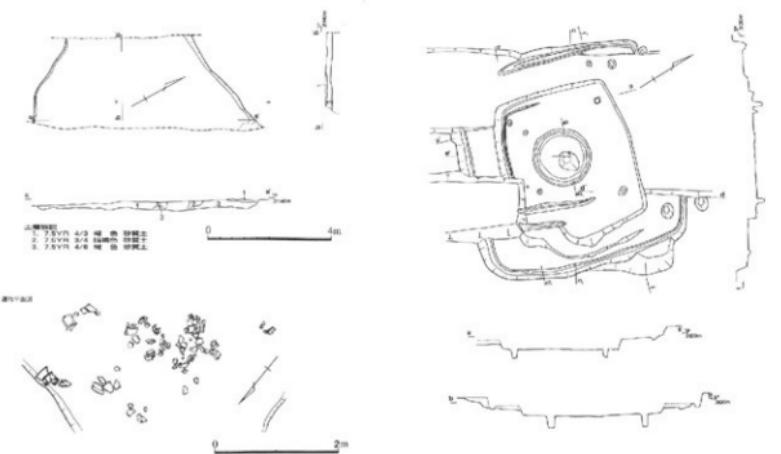


fig. 494 SH04平面図・断面図



fig. 495 SH05

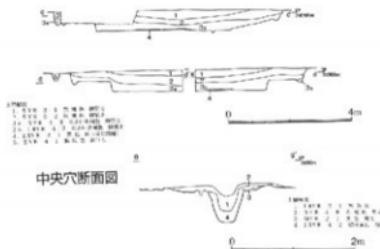


fig. 496 SH05平面図・断面図

出土遺物は、床面上中央穴西側に17などの土器片と磁石1点(S 1)、ベッド上西壁体に18などの土器片が見られた。

この住居は土器から庄内式後半併行期に埋没したと言える。

S H06 中央部西端に位置し、半分程度が調査区外に出る。形状は方形であると思われる。

中央穴は円形で、掘形に熱影響が見られる。中央穴南側に土坑を2基確認し、南側のものの埋土は炭化物を含んでいる。床面では貼り床は存在しない可能性が高い。また、東柱穴間に住居内溝が見られる。

出土遺物は土器で、床面付近では床面からは浮いているが完形に近い20などがある。19は埋土上層で確認した。

時期は、住居の形態から布留式併行期に入っていると考えている。

S H07 調査区南端中央に位置し、S H01を切る。また上層の包含層に切られる。半分以上は調査区外に残る。形状は方形である。

柱穴は2本確認し壁体溝も存在したが、中央穴・貼り床は未確認である。

出土遺物は土器片で、いずれも埋土中から出土した。図中、21などがある。

時期は、土器から布留式併行期でもS H06や15より新しい段階になるものと思われる。

S H08 調査区中央でS H05の北に隣接する。北側約3分の1以上は調査区外である。搅乱が2カ所入るため、床面は明瞭に確認できなかった。形状は隅丸方形で、ベッド状遺構を有する。

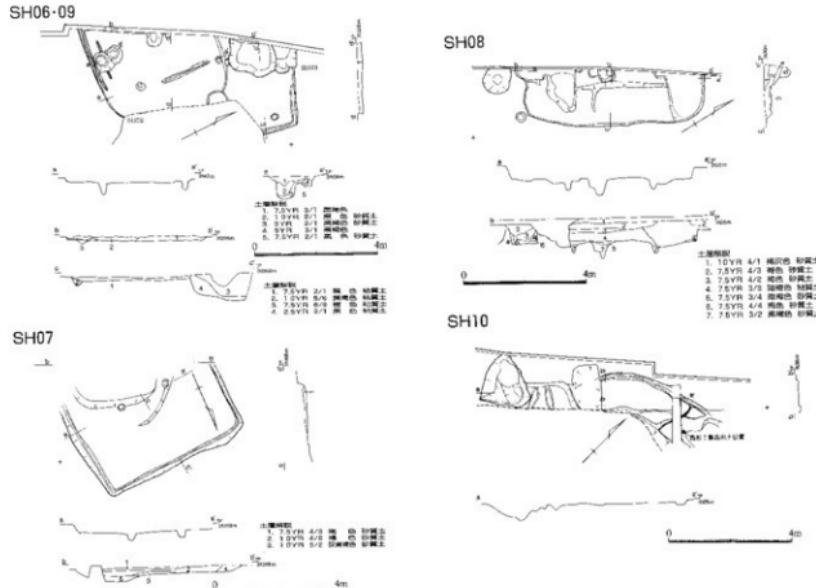


fig. 497 S H06~10平面図・断面図

東側のみベッド状遺構を確認しているが中央穴や貼り床などはよくわからない。柱穴は2本と中央に1本が見られ、埋土は断面図b-b'の7層である。

出土遺物は土器で、23が床面、22が埋土中からの出土である。

時期は、土器から庄内式併行期と想定できる。

S H09 調査区北側でS H06に切られるものと思われる、方形の住居である。壁体溝のみを確認した。出土遺物は埋土中に土器片を確認している。

時期は、S H06より新しいがおおよそ布留式併行期であろう。S H06のベッド状遺構である可能性もある。

S H10 調査区北側で、西端に位置する円形の堅穴住居である。

調査区内に全て存在するが、中世の包含層などに切られ残りは悪く、壁体溝のみ確認した。S H19との間には現代の擾乱があり、全体の形状が不明瞭である。

時期は埋土中から土器が見られないため断言できないが、S H01と同じく庄内式前半併行期に相当すると考えられる。

なお、この住居東側の、住居を切っている包含層中から鳥形土製品が出土している。

S H11 位置は調査区の北西端近くで、西側大部分は調査区外である。形状は円形で、方形の張り出しが付く。

中央穴や柱穴は確認できなかったが、貼り床は張り出し部で確認できた。(断面図a-a'の1層)。壁体溝は、張り出し部の下側には巡らない。最初張り出し部を別の住居かと考えていたが、結局同一の住居であることがわかった。またS K21が中央を切るが、S K21はS K11の埋土中央部落ち込みを誤認した可能性がある。

遺物としては、24の甕底部が埋土中、25の鉢が床面に貼り付いて出土している。

時期は遺物から弥生時代後期から庄内式併行期と言える。S H01より1段階古いものであろう。

S H12 調査区北東端に位置し、東側約3分の1は調査区外になる。北側は包含層(断面図c-c'の2層)によって切られる。この包含層は北斜面向かって流れ、土質から中世以降と考えられる。形状は柱穴の配置などから、おそらく5角形であると思われる。ベッド状遺構は検出できなかったが、写真ではうっすらとうかがえ、柱穴配置からも存在する可能性が高い。

中央穴の掘形は3段程度の段が内側に巡っている。北側には黄色の叩き面が部分的に見られ、外側に土手を築いていた可能性もある。埋土中に炭化物(中央穴断面図の2・3層)が残る。

柱穴は7本を確認した。柱穴の埋土は1層で置き土は見られなかった。主柱穴は壁体溝に添う3本であろう。中央穴南側の2本は床面からの深さ0.5mを測り、主柱穴と考えられる3本の0.2~0.4mに対して深く、注目されよう。

出土遺物は土器片が床面から浮いた状態で出土していて、住居内に意図的な廃棄はうか

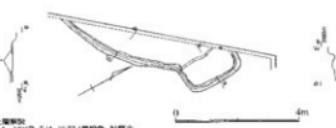


fig. 498 S H11平面図・断面図



fig. 499 SH12

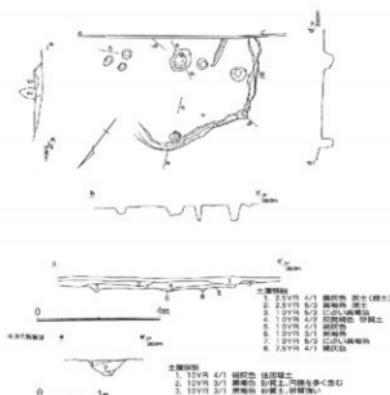


fig. 500 SH12平面図・断面図

がえない。26は埋土中から出土している。壺の底部であろう。

時期は土器からでははっきり断言できないが、庄内式併行期であろう。

- SH13** 調査区北側中央部に位置する、円形かと思われる住居である。S K34が中央をきり、現代の擾乱により両側を切断される。壁 SH13
体溝によって両端の範囲のみ確認できた。床面直上の遺物は見られない。

時期は不明である。

- SH14** 調査区北側中央、SH13の南に位置する方形かと思われる住居である。やはり現代の擾乱により両側を切断されため詳細は不明である。

床面から出土の遺物が2点ある(27・28)が、いずれも破片である。

時期は庄内式併行期と考えられる。

- SH15** SH12の南で、東端に位置する。半 分は調査区外になる。形状は方形、ベッド状遺構を有する。

ベッド状遺構は地山を成形したものである可能性の方が高い。ベッド状遺構についても、その下段でも貼り床の存在は指摘できなかった。ベッド上北側に土坑、その南側ベッド下にも浅い土坑を有し、中央穴は存在しないと思われる。壁体溝では特に南側で杭の痕跡かと思われる輪状の窪みが観察できる。

埋土は擾乱もないため、自然堆積したものであろう。

遺物は、床面から29の甕片などが出土した。30・31は埋土中である。完形品は残されていない。

時期は布留壺より布留式併行期に該当する。SH06と同時期であろう。

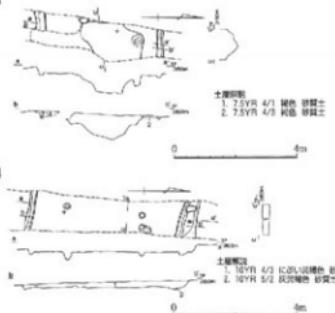


fig. 501 SH13・14平面図・断面図

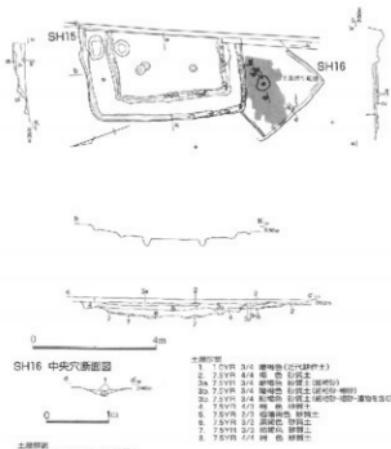


fig. 502 SH15・16平面図・断面図

SH16 調査区北側に位置し、SH15に切られる。形状は方形で、ベッド状遺構を有する。

土層図e-e'では、1層に土器溜りがあり2層を挟んで地山になる。中央には中央穴に類似する焼けた面が存在する。2層には焼土の固まりがこの中央穴類似遺構の上部を中心としてみられた。壁体溝は北・南辺に確認できる。

この住居は方形でベッド状遺構を持つ住居の、ベッドより下の段が削平されずに残ったものであろう。土器溜りは、住居が廃絶した直後土器を投棄したものと考えられる。

時期は、出土した土器が整理できなかったためはっきりとは言えないが、庄内式併行期に相当する。

SH17 調査区北側東端に位置する。上層に土器が多く含む落ち込みがあり、中央部では床面近くまで達している。形状は方形である。

ベッド状遺構を有するが、南側はSH18の影響で不明瞭であった。このベッドは、おそらく盛土で構成された部分が存在したと思われる（土層図b-b'の12層）。柱穴は1本検出できた。柱穴以外には中央部に浅い土坑が見られる。

土器は床面から出土したが、上層の落ち込みの影響で住居の土器と識別が困難であった。32は落ち込みに伴う甕である。完形に近いものは住居の西隅に集まっている、33はこの部分から出土した。

土器から、この住居は庄内式併行期から布留式併行期に廃棄されたものと思われる。中央部落ち込みは、布留式併行期に近隣から廃棄されたものであろう。

SH18 SH17の南に位置し、SH17に切られる方形の堅穴住居で、ベッド状遺構を持つ。東側半分は調査区外である。壁体溝が2条になる部分があり、建て替えがあったようである。

ベッド状遺構内側西辺の曲線は、住居外側の壁体溝のうち外側を回るものと合致している。最終と考えられる住居の外側壁体溝は直線になっているから、このベッドは前の時期



fig. 503 SH15

の住居に伴うと考えられる。最終住居のベッド内辺は検出時に確認できなかった。断面・平面観察より、このベッドは盛土（土層図 b - b' の20層）が成されていることもわかった。

中央穴は橢円形を呈し、西側の底面が搔き出したような傾斜である。中央穴の周りには検出時から炭化物が見られ、特に南側は層状になっている。中央穴南西縁には熱影響部分が見られる。土層図 d - d' の 3・4 層は炭を含まない。また中央穴周辺の炭化物層を水洗したところ、1~3mm の黒色溶融物質が確認できた。この性格については不明だが、何らかの滓というものが最も適切であろう。

前段階住居壁体溝の外側に落ち込んだ状態で、熱影響の見られる砂岩の破片を検出した。鑑定はしていないが、鋳型の可能性も考えられる。黒色溶融物質と関連して、興味深い。床面からは土器片が出土しているが、完形品はない。34 は床面から出土したものである。

この住居の時期は、土器から庄内式後半併行期と想定できる。



fig. 504
SH17・18

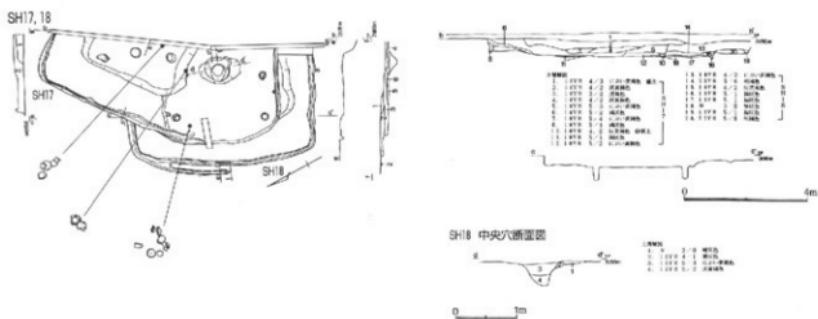


fig. 505 SH17・18平面図・断面図

SH19 調査区中央部に位置し、東と西にそれぞれ現代の擾乱が入るため幅わずか40~70cmしか残っていない。形状は不明であるが、北側に位置するSH10の続きと想定する場合円形の住居となる。

壁体溝は南北に2条確認できたが、さらに住居内南側には2条の壁体溝があり、建て替えや住居の重複も考えられる。中央穴はかろうじて残っていたが、埋土には炭化物は見られなかった。

土器は床面から出土した35がある。時期はやはり庄内式併行期であろう。

SH20 調査区南側西端に位置し、住居の一部が調査区内に検出された。形状は方形の可能性が高い。出土土器から、庄内期併行の住居と考えられる。

SB01 調査区南東端、SH01上に検出された1×1間以上の建物である。柱間は2m、柱穴の深さは40cm程度である。

時期は不明であるが、埋土の土質からおそらく中世であろう。

SB02 調査区南側西端に位置する。現状で4.8×3.8mを測る、南北3間×東西2間以上の掘立柱建物である。柱間は1.5~2.2m、柱穴の深さは7~25cmを測る。

柱穴から出土の遺物は小片で時期決定は困難であるが、おそらく中世に所属する建物であろう。

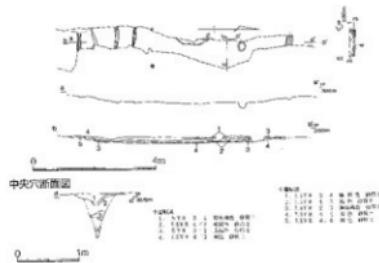
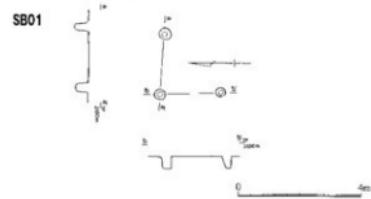


fig. 506 SH19平面図・断面図

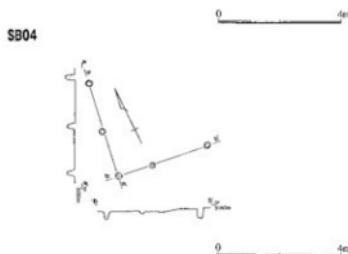
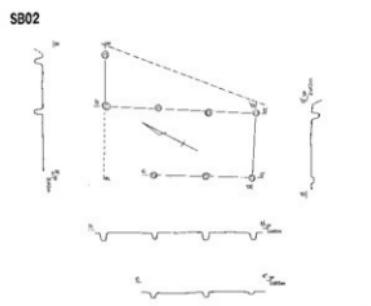
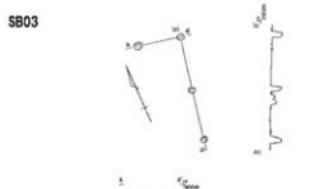
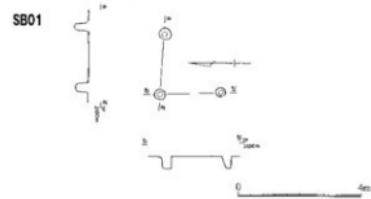


fig. 507 SB01~04平面図・断面図

- S B03 調査区南側東端に位置する、 $3.5 \times 1.4m$ 以上の規模の南北2間以上×東西1間以上の掘立柱建物である。柱間 $1.4\sim 1.7m$ 、柱穴深さ $35cm$ 程度である。これもおそらく中世の建物であろう。
- S B04 現状で $3.2 \times 3.0m$ を測る、 2×2 間以上の建物である。柱間は $1.2\sim 1.8m$ である。柱穴の直径は $20cm$ で、置き土などは見られない。
- 柱穴からの遺物は土器片が少量で、S B01～03と同様中世に属するものと考えたい。
- S K15 S H01の南に位置し、 $2.0 \times 1.5m$ 、深さ $0.4m$ 程度を測る長楕円形の土坑である。地山の礫かと思われる礫に混ざって東播系須恵器、瓦、巻貝、獸齒と獸骨が検出された。実測図36は捏ね鉢で、12世紀後半から13世紀にかけての時期が与えられる。
- S K35 S H15の北に位置する、 $2.3 \times 1.6m$ 、深さ最大 $0.48m$ を測る楕円形の土坑である。上層に弥生時代後期の土器が多く含む。
- 断面の状況から竪穴住居の柱穴もしくは中央穴の可能性もある。

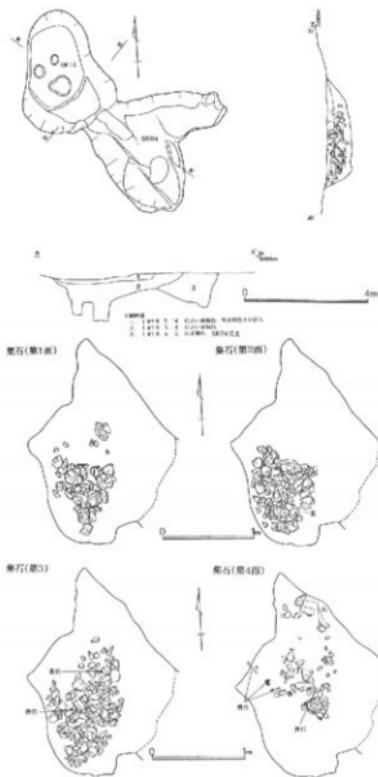


fig. 508 SK15平面図・断面図

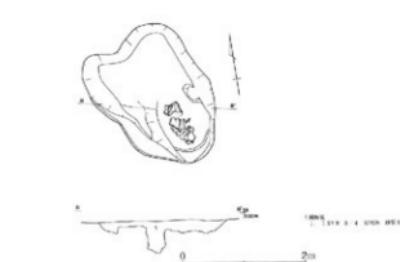


fig. 509 SK35平面図・断面図



fig. 510 SK15

その他の遺構 S H03上に4基の集石、S H07上に溝2条、S H01上には2基の土坑が存在した。いずれも出土遺物や層位から中世と考えられる。その他の土坑は性格が不明だが、弥生時代後期から中世にかけてのものであろう。風倒木からは土師器のみが出土していることから、古墳時代前期以前のものである。

遺 物 壺穴住居、土器溜り、包含層を中心として弥生土器・土師器などがコンテナ68箱分出土した。少量ではあるが中世の布目瓦や東播系須恵器も見られる。特筆される遺物として、S H10を切る包含層中から出土した鳥形土製品の頭部がある。

鳥形土製品（D 1）はS H10南側の住居を切っている包含層中から出土した。完形品ではなく、頭部のみである。くちばしの先端と頭頂部が磨滅しているため表現が不明である。頭頂部には波状の凹凸が4ヶ所見られる。後頭部から頸にかけて1条の溝が刻まれ、本体に装着する際に棒状のものを通していったと思われる。また両面で目の表現が異なるのはユニークである。底面以外の外面にはヘラミガキか線刻の跡が残り、赤色顔料の塗布が見られる。

鑑定など 壺穴住居中央穴埋土を洗浄した。実施したのはS H01、S H05、S H12、S H18である。S H18のみは中央穴周辺の埋土である。S H01、05、12からは炭化米が検出されたが、S H01からはサヌカイト剥片が、S H18からは先述のように黒色溶融物質が見つかり予想以上の成果を上げた。

3. ま と め 今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落と中世の日輪寺関連の遺構を検出し、注目すべき成果を上げることができた。

弥生～古墳時代にかけては、壺穴住居が切り合いながら変遷する様が確認できた。今回の調査区が集落の中心地であったことは間違いないが、第3次調査の成果からは北西への広がりはある程度制限されることが予想される。西側隣接の荒れ地を含めて、日輪寺より南側に集落の広がりがあるのではないだろうか。時期的には庄内期・布留期を中心とした比較的短時間の集落であったと言え、それ以前と以降の集落の所在追求はこれからの課題であろう。南に隣接する二ツ屋遺跡との関連は注意すべきである。また、鳥形土製品のような祭祀的遺物は政治中枢の存在を予感させるもので、ますます近隣の調査に期待が集まるものである。

中世では、掘立柱建物と土坑、集石などが確認された。瓦の出土はあったが少量で、土坑も少なく、寺院そのものの遺構は見られないなど寺域の縁辺であることは明らかだろう。ただ中世遺構は削平が激しく、今回の調査だけでの断定は避けておきたい。中世日輪寺の寺域追求は引き続いて今後の課題である。

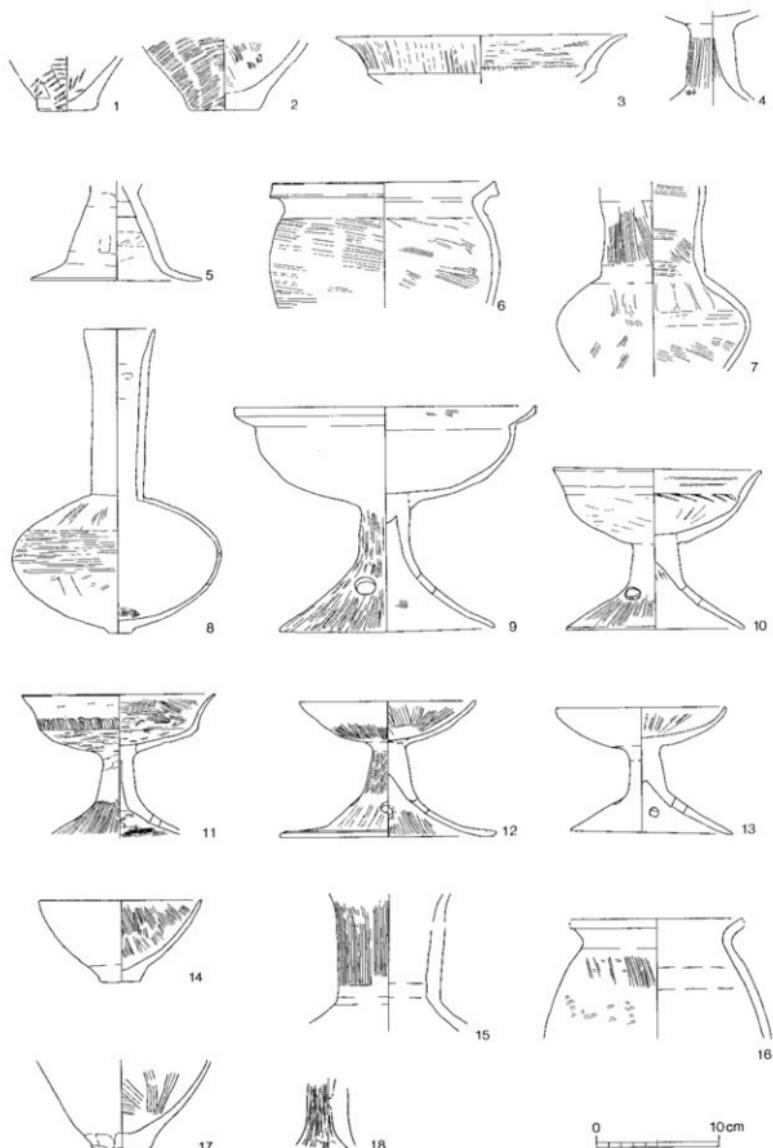


fig. 511 出土遺物実測図(1)

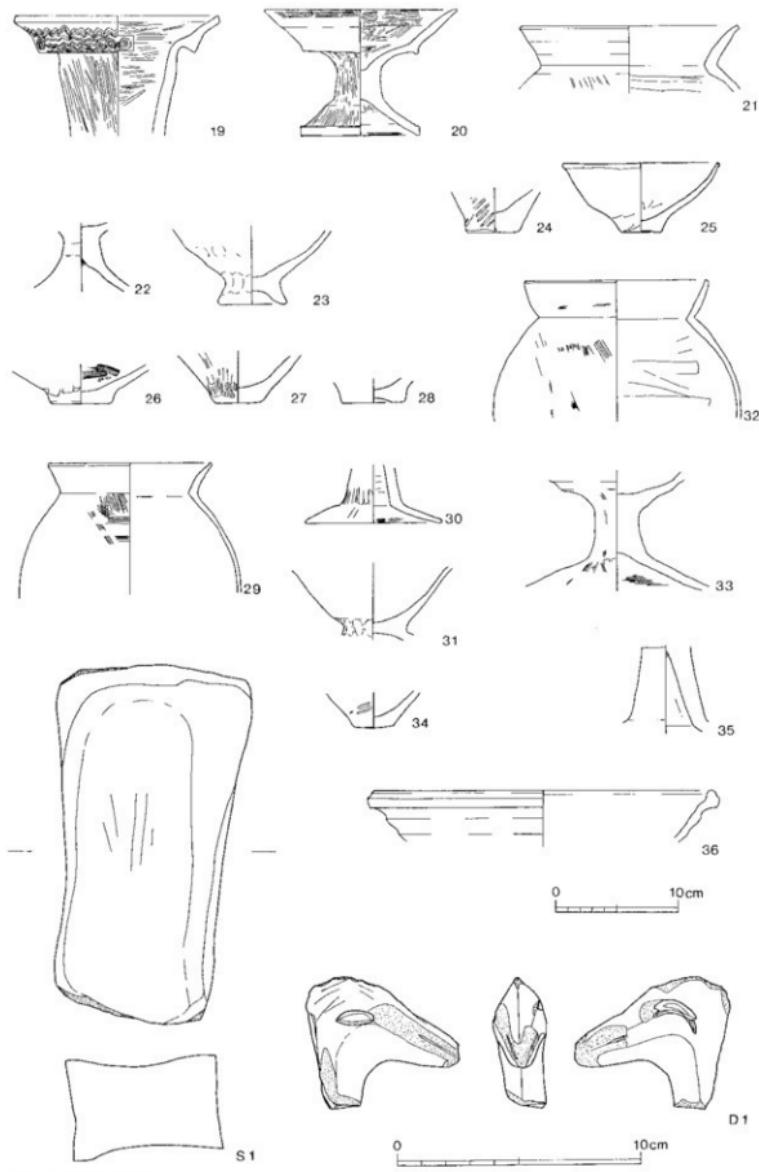


fig. 512 出土遺物実測図(2)

で あい 64. 出合遺跡 第36次調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川下流域の右岸、標高12m～15mの沖積地と西側台地縁辺に位置している。これまで、35次にわたって調査が実施され、西側台地上で帆立貝式古墳や奈良時代の井戸が検出されている。一方、沖積地では弥生時代後期～中世までの遺構、遺物が検出されている。



fig. 513
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、第35次調査地の道路敷の東に隣接する宅地造成地内で、造成工事に伴って埋設管の敷設される道路部分について実施した。

第1遺構面

調査区の現況は全域が80cm～120cmの盛土されている。その直下に近現代の耕作土、床土が認められ、さらに近世の耕作土と考えられる灰黄色粘性砂質土が堆積している。この近世耕作土の上面では、牛の足跡・稲株痕跡などが観察できる。

第2遺構面

近世の耕作土を除去すると、調査区中央東より南北に細長い黄褐色粘質土に灰色砂質土を交えた帶状の

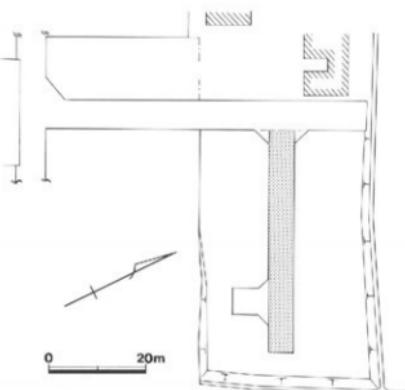


fig. 514 調査区設定図

高まり 2 条を検出した。帯状の高まりは、断面形が蒲鉾形で、2 条とも現代の当地域の水田地割と同方向である点から、水田畦畔と考えられる。

遺構の畦畔基盤層である黄灰色粘質土と、水田耕土と考えられる灰褐色粘性砂質土からは、須恵器・土師器・陶器などが出土することから、室町時代以降の水田と考えられる。

水田畦畔 水田畦畔は、西側の畔が残存状況の良好な北側で基底幅 1.0m、高さ 20cm、東側の畔が北側で基底の幅 80cm、南側で 2.5m、高さ 10cm 前後を残存させている。畦畔の方向は 2 条とも北 20 度東で、ほぼ所謂明石郡条里と同方向である。

第3 遺構面 中世の水田基盤層を除去すると、調査区西部では灰色粘性砂質土が分厚く堆積しておりその下が中世の遺物包含層である暗灰色粘質土となる。中世遺物包含層の直下は明黄灰色シルト・灰褐色シルト・暗灰色粘土が互層に堆積し、遺構面となっている。なお、調査区西部の遺構面は、互層堆積の下層である緑灰色粘土面を遺構面としている。

第3 遺構面において、調査区東部では南北に流れる自然流路 1 条を検出した。また中央

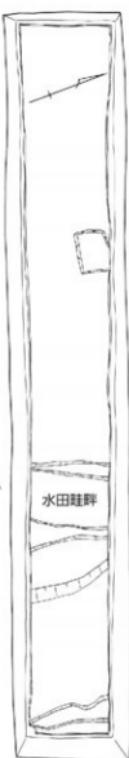


fig. 515 第2遺構面平面図



fig. 516 第2遺構面全景

0

10m

部では掘立柱建物 2 棟と溝 1 条・土坑 1 基、西部では土坑 3 基と柱穴などを検出した。

自然流路 自然流路は幅 4.0m、深さ 80cm、断面 U 字形で粘質土と砂が互層に埋没していた。埋土内からは、弥生土器細片・流木などが出土した。

掘立柱建物 1 掘立柱建物 1 は、東西 5.0m 以上、南北 3.5m 以上の規模で、東西 4 間以上、南北 2 間以上である。建物の西側は調査区外となる。建物の柱掘形は長径 50cm 前後の楕円形で、深さ 20cm～50cm 前後、20cm 程度の柱痕跡を残している。一部の掘形には柱の抜取りの痕がみられる。建物の西側の柱掘形は、溝の掘削によって削平を被っている。

掘立柱建物 2 掘立柱建物 2 は、掘立柱建物 1 の西側に位置し、重複すると考えられるが、その前後関係については、建物 2 の柱並びが溝と並行していること、溝が建物 1 の柱掘形を削平していることなどから、建物 1 が建物 2 に先行すると推定される。

掘立柱建物 2 の規模は、東西 3.8m、南北 5.2m 以上、東西 2 間、南北 3 間以上で、建物の南側は調査区外となる。建物の柱掘形は一辺 50cm 前後、深さ 20cm～30cm で、一部の柱掘形で直径 20cm 程度柱痕跡を残している。

溝 掘立柱建物 2 の東側に並行して掘られた溝である。幅 1.4m から 1.5m 前後、深さ 15cm 前後の断面 U 字形である。溝の埋土内からは、須恵器片・土師器片が少量出土した。なお、溝は南側で掘立柱建物 1 の柱掘形を削平している。

土坑 1 調査区の西部南辺沿いに検出した楕円形の土坑である。長径 1.6m、短径 1.2m、深さ 10cm 前後で、断面形は船底状をしている。埋土は暗灰色粘質土で、埋土内から土師器片が出土している。

土坑 2 調査区の南端で検出した不定形の土坑である。長径 1.4m、短径 1.2m、深さ 6 cm 前後の浅い土坑である。埋土は、灰色粘質土で、埋土内からは土師器細片が出土している。

土坑 3 土坑 1 の東側で検出した楕円形の土坑である。長径 1.3m、短径 1.1m、深さ 5 cm 前後の浅い土坑である。埋土は、灰色粘質土で、埋土内からは土師器細片が出土している。

土坑 4 掘立柱建物 2 の西側で検出した楕円形の土坑である。長径 2.0m 以上、短径 1.2m、深さ 10cm 前後を測る。埋土は、灰色粘質土で、埋土内からは土師器細片が出土している。



fig. 517
掘立柱建物 2

3. まとめ 今回の第36次出合遺跡の発掘調査では、前年度第35次調査で実施した道路内の下水道敷設に伴う調査地でも検出した中近世の水田畦畔と掘立柱建物・自然流路を検出した。

中近世の水田畦畔は第35次調査検出の水田畦畔とほぼ同一方位を探り、同時期の水田と考えられる。一方、掘立柱建物は、掘立柱建物1、2と関連する溝とも北20度西方位をとっている。これは、第35次調査検出の柱列物方向とは異なる。また、今回検出の掘立柱建物の掘形内からは明確な遺物はないものの、建物を被覆する包含層内から鎌倉時代後半の須恵器壊身が出土していることなどから、柱列より時期は遅るものと考えられる。



fig. 518 第3遺構面全景

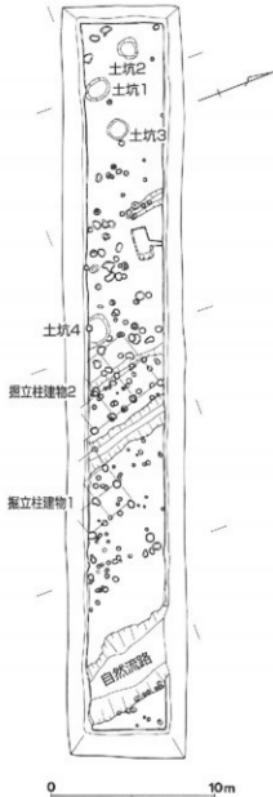


fig. 519 第3遺構面平面図

65. 出合^{あい}遺跡 第38次調査

1. はじめに

出合遺跡は明石川下流域の西岸、明石累層からなる台地上と、沖積地とにまたがる広範囲におよぶ遺跡である。これまでの調査では、弥生時代中期の周溝墓、古墳時代中頃から後半の堅穴住居、帆立貝式古墳、奈良～平安時代・鎌倉時代の掘立柱建物などが検出されている。今回の調査地は、第27次調査地の南西約100mに位置しあり、南西から北東へ緩やかに傾斜する地形に立地する。



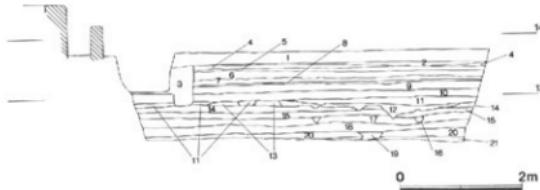
fig. 520
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成に伴う擁壁部分と地下埋設管により、埋蔵文化財に影響を及ぼす約210mについて実施した。

調査区は、西側の南北方向トレンチを1トレンチ、東側を2トレンチとし、東西方向のトレンチを北側からそれぞれ3トレンチ～7トレンチと呼称する。

基本土層 基本土層は、①耕土・盛土 ②灰黄色シルト質土〔旧耕土〕 ③淡灰色シルト質土 ④茶灰色シルト〔古墳時代遺物包含層〕 ⑤淡黄灰色砂質土 ⑥灰色粘土 ⑦暗灰色粘土 ⑧灰色粘土 ⑨暗灰色粘土である。



1. 鮎土	12. 黄灰青色シルト質砂砾
2. 鮎土	13. 純灰色地粘土
3. 土質	14. 褐灰青色シルト質粘土
4. にじみ青色シルト質土	15. 褐灰青色シルト質粘土
5. 暗褐色地粘土質土	16. 灰暗褐色地粘土
6. 暗红色地粘土質土	17. 黄暗褐色地粘土
7. 黄褐色地粘土質土	18. 黄褐色地粘土
8. 暗黄色地シルト	19. 黄褐色地土
9. 暗褐色地粘土	20. 暗色粘土
10. 暗褐色地砂質砂砾	21. 暗色粗颗粒
11. 纯黑色地粘土質土	

fig. 521 5 トレンチ断面図

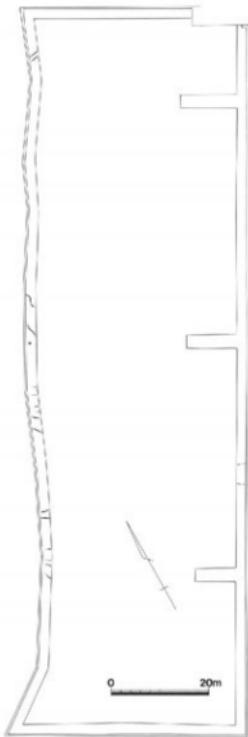


fig. 522 調査区平面図

〔1 トレンチ〕 総延長 75m の南北方向トレンチである。遺物包含層の残存状況は、南半が良好である。

S K02 検出幅約 94cm、深さ約 16cm の土坑である。埋土上層から古墳時代後期の須恵器壺蓋や土師器が出土した。



fig. 525 S K04遺物出土状況



fig. 523 1 トレンチ全景



fig. 524 2 トレンチ全景

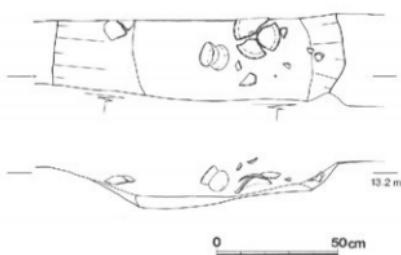


fig. 526 S K04平面図・断面図

- S K04 長さ約120cm、深さ約20cmの土坑である。暗灰色砂質シルトを埋土とする。古墳時代の布留式後半と思われる土師器高杯や小型丸底壺などが出土した。
- S D03 トレンチに直交するような形で検出した、幅約80cm、深さ約80cmの断面逆台形の溝である。淡灰色砂を埋土とする。
- S D04 中央部で検出した南北方向の溝である。幅約1mで、東側は一段低くなり、深さは約10cmである。埋土は、淡灰色細砂である。遺物は、古墳時代の土師器壺片が出土した。
- S D05 南東～北西方向の幅約2m、深さ約90cmの断面形が逆台形をなす溝である。埋土は暗灰色シルトと青灰色細砂である。埋土上層より古墳時代の須恵器片が出土した。
- その他、北端で最下層から溝を1条検出した。埋土は灰色粘質土である。出土土器はごく小片であるが、層位などから弥生時代の遺構と思われる。
- また、トレンチ北半部の古墳時代遺物包含層相当層から、鍛先と考えられる鉄器が出土した。
- 断面の観察からは、③層直下の遺物包含層を切り込む遺構と、包含層掘削後に検出できる遺構の、2面の遺構面が存在したようである。
- 〔2トレンチ〕 長さ約75mの南北方向の東側トレンチである。遺構は、トレンチ中央部分の5トレンチと6トレンチの間で、土坑を1基検出した。
- S K01 南北長190cm、深さ50cmである。埋土は、黄灰色粘質土から褐灰色粘性シルトである。遺物は、上層から土師器小片が多く出土し、下層からは土師器小型丸底壺や高杯が出土した。古墳時代前半頃のものと思われる。遺構内からは須恵器の出土はみられなかった。

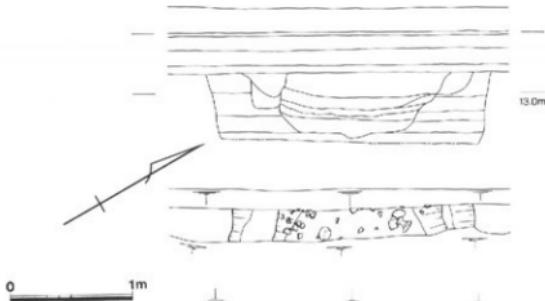


fig. 527
SK01平面図・断面図



fig. 528 SK01

〔3 トレンチ〕 長さ約18mの北端に位置する東西方向トレンチである。

東側上層部分で旧地形・水田の段差を確認した。その他の土層はほぼ水平堆積である。最下層にちかい暗灰色粘土から、弥生土器と思われる小片が出土した。上層からも土器片は出土したが、量も少なく、遺構は確認されなかった。

〔4 トレンチ〕 長さ約5mの埋設管部分のトレンチである。遺物は、旧耕土や淡灰色シルト性粘質土から土師器・須恵器が出土している。また、最下層に近い、にぶい黄色シルトから弥生土器と思われる小片が出土している。遺物を含む土層は何層か確認できたが、それぞれの掘削後の検出面で遺構は確認できなかった。

〔5 トレンチ〕 長さ約5mの埋設管部分のトレンチである。

S D01 茶灰色粘質土上面で、幅2m以上、深さ約30cmの溝を検出した。埋土下層は、黄灰色シルト質細砂が堆積し、底面は凹凸が著しい。埋土や形状は、1トレンチで検出したS D04に類似する。

〔6 トレンチ〕 長さ約4mの埋設管部分のトレンチである。旧耕土層の掘削後、マンガン沈着層上面で古墳時代後期の須恵器片・土師器片が出土した。

トレンチの下層は粘土層であり、植物遺体も包含する。

〔7 トレンチ〕 長さ約23mの南端の東西方向トレンチである。工事影響レベルの関係で、遺物包含層上面までの掘削で終了した。旧耕土から、須恵器片・土師器片が出土している。

3. まとめ 今回の調査では、掘削範囲が幅約1mと限られており、しかも搅乱によって遺物包含層と遺構面が削平されている部分が多くあったため、遺跡の状況を十分確認するにはいたらなかった。その中で、1トレンチで検出した遺構と、試掘調査における遺構・遺物の出土状況から、当該地における古墳時代の遺構の広がりを推察できたことは重要である。今後、周辺での発掘調査によって、より一層遺跡の状況が明確にできるものと思われる。



fig. 529 S D04遺物出土状況

66. 今津遺跡 第8次調査

1. はじめに

今津遺跡は、明石川と樋谷川の合流地点から南へ約1キロ、明石川右岸の標高10m前後の沖積地に拡がる遺跡である。周辺には、南に弥生時代から中世の集落遺跡である新方遺跡が隣接しており、東の丘陵上には弥生時代から平安時代の集落遺跡である高津橋岡遺跡と接している。

今津遺跡のこれまでの調査は、宅地開発が進み昭和55年に実施された第1次調査から今回の調査で第8次調査となる。これまでの調査では、弥生時代中期の竪穴住居や木棺墓、土坑墓、壺棺墓、土坑、溝や古墳時代後期の大溝が検出されている。

fig. 530
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回調査した地点は、高津橋岡遺跡が存在する丘陵の西側に接している。今津遺跡の東端にあたり、丘陵の裾に位置している。

調査地は、圃場であり、搅乱は比較的少なく、層序に大きな乱れも認められなかった。

第1トレチ 丘陵にもっとも近い東西方向に設定したトレチである。トレチのほぼ中央でベースとなっていた砂礫層が落ち込み、植物遺体を多く含む粘質土層が堆積しており、更に下層にはラミナート状の土層が堆積していることから、丘陵の裾に流れる河道につながる湿地地帯と思われる。この湿地堆積からは、古墳時代から平安時代の遺物が出土した。

第2トレチ 第1トレチと道を挟んで西隣りに東西方向にトレチを設定した。現耕土下約50cm (T.P. 10.100m) 前後で、溝 (SD01) を検出した。溝は幅約2.6m、深さ約60cmの規模をもち、南に流れるものと思われる。また、この溝の東側で不明土坑 (SX01) を検出した。この不明土坑からは、先の尖った幅約15cmの板が投棄された様な状態で出土した。木材は、櫻製であり全面に削った痕跡が残っていることから、農工具と思われるが器種の特定はできない。遺物は少量であるが、溝、不明土坑とともに古墳時代の遺構と思われる。

第3トレチ 第2トレチの南20mに東西方向のトレチを設定した。現耕土下約50cm (T.P.

10.000m) 前後で、水田畦畔を検出した。畦畔の幅は、40cm～60cmで高さ約12cmの規模である。これらの畦畔はすべて、南北方向のもので畦間は約4mであるが一区画を完全には検出できなかったため面積は不明である。

第4トレンチ 第2トレンチの東に接し、現道に沿って南北方向のトレンチを設定した。現耕土下約50cm (T.P. 10.100m) 前後で、溝を検出した。規模、方向、検出位置から考えて、第2トレンチで検出した溝 (SD01) の続きと思われる。

3. まとめ 今回の調査では、住居などの集落址は検出されなかったが、古墳時代後期の水田を検出した。当時の景観として、高津橋岡遺跡のある丘陵の西裾に沿って河道が北西方向から南西方向に大きく湾曲しながら流れしており、その流れに沿うように溝が設けられ、その内側に水田が営まれたものと思われる。今津遺跡の集落域と水田地帯との土地利用がわかる資料となる。

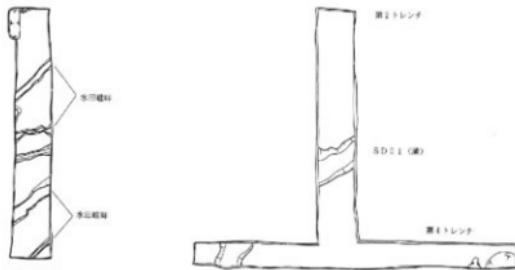
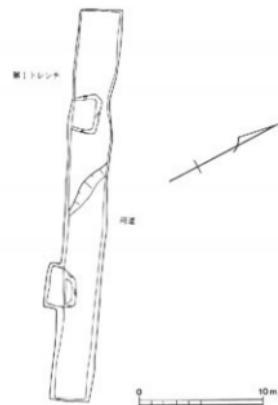


fig. 531 調査区平面図



fig. 532
3トレンチ全景



いまとづ 67. 今津遺跡 第9次調査

1. はじめに

今津遺跡は、明石川と櫛谷川の合流地点から南へ約1キロ、明石川右岸の標高10m前後の冲積地に拡がる遺跡である。周辺には、南に弥生時代から中世の集落遺跡である新方遺跡が隣接しており、東の丘陵上には弥生時代から平安時代の集落遺跡である高津橋岡遺跡と接している。



2. 調査の概要

今回調査した地点は、高津橋岡遺跡が存在する南西方向に延びる丘陵の西側に接している。今津遺跡の東端にあたり、丘陵の裾に位置している。

調査は、埋設施設および擁壁工事影響部分のみの調査とした。調査地は、圃場であり、擾乱は比較的少なく、層序に大きな乱れも認められなかった。

道路計画の区画に合わせて西から第1～第3トレントとし、事業敷地の東南辺に設置予定の擁壁部分を第4トレントとした。掘削土の置場の関係から第4トレントを先行して掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。

第1～第3トレントも同じく顕著な遺構は検出されなかったが、第1トレントの乳灰色シルト質極細砂層から半分欠損した貨幣が出土した。この貨幣には、四角い穴（郭）を中心に右に「平」、下に「元」の楷書があり、背は無背である。この配列の文字をもつ貨幣としては、『咸平元宝』『治平元宝』『端平元宝』を巡回したものであり、背は無背であることと書体から『治平元宝』と特定される。治平元宝は、西暦1064～1067に中国で鋳造された北宋銭である。その他、遺物としては東播系須恵器を中心とした中世の遺物が少量出土した。

下層確認のため、西から順に3ヶ所の断面坑を設けた。断面坑の結果、現耕土下約80cm (T.P. 9.300m) 前後で、暗青灰色極細砂シルト層が確認された。これは、北東約100

mの第8次調査で確認された古墳時代の水田層と同じ土質であったため、畦畔を確認するため第1断割坑から第2断割坑にかけてサブトレンチを掘削した。その結果、畦畔を確認することはできなかったが、第2断割坑の南側で、地震の影響とおもわれるクラックが検出された。遺物は断割り調査時には出土しなかったため、地震の発生時期については不明である。

3. まとめ 今回の調査では、遺構は検出されなかったが、古墳時代から中世にかけての遺物が少量出土した。断割り調査の結果、この地域は小河川や湿地帯の影響を受けた不安定な地点であり、住居地としては不適切であったと思われる。旧耕土中から複数の時期の遺物が出土することから、近辺に集落跡が存在するものと思われる。

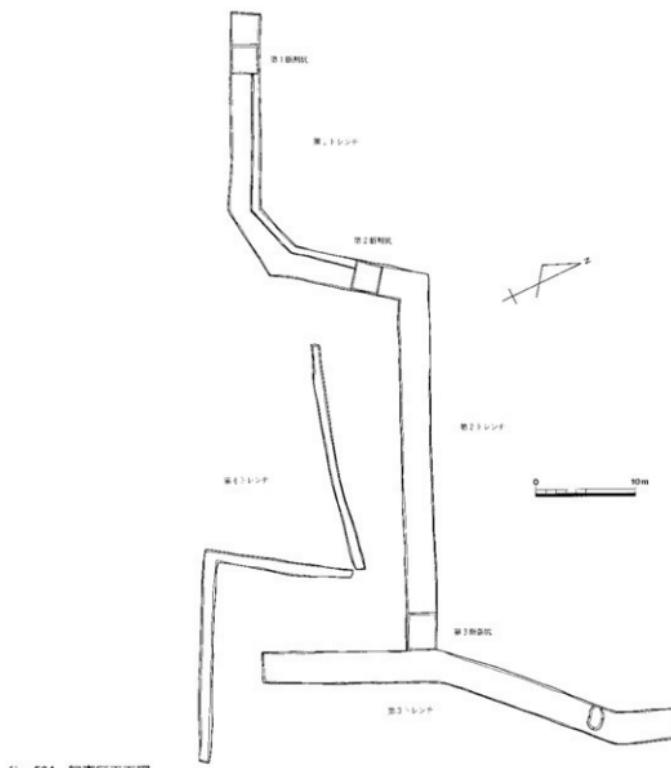


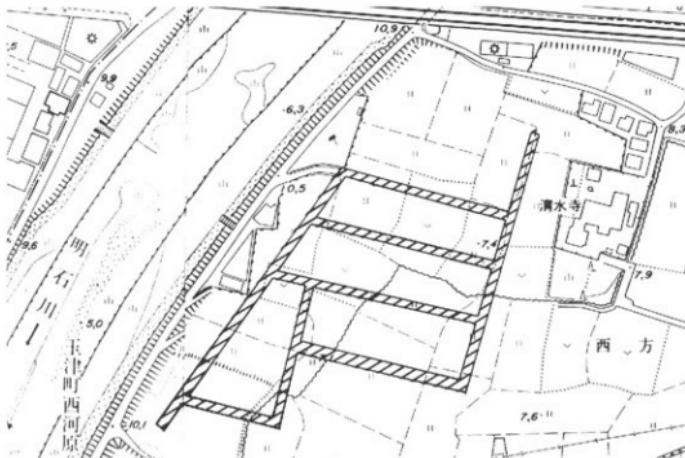
fig. 534 調査区平面図

68. 新方遺跡 野手・西方地区 第1・2次調査

1. はじめに

新方遺跡は、明石川とその支流である伊川の合流する地点の北側に広がる。西河川によって形成された沖積地上に、弥生時代から近世に至る遺構が確認されている。特に弥生時代中期及び古墳時代中期末から後期にかけて、多量の遺構、遺物が検出されている。弥生時代中期以降に検出される玉造りに関する遺構、遺物は、当遺跡を特色付けるものとして注目されている。今回の調査は平成8年度から9年度にかけて実施したもので、低湿地を挟む西側（2～4トレンチ）と東側（1トレンチ・B～F区）の微高地において調査を実施した。1トレンチについては第1遺構面のみ、B～F区については第5遺構面以下の調査を実施した。

fig. 535
調査位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

現耕作土を除去すると、近世の遺構面が検出され、畝状遺構と墓域が検出された。耕土1～4トレンチ層はほぼ全区で検出され、残存状況の良い1トレンチでは、洪水砂で覆われた畝状遺構が第1遺構面検出された。長さ19m程度、幅90cm程度の間隔で畝を設けている。畝の方向はほぼ磁北である。区画の境には東西方向の畝を設けている。2トレンチ及び3トレンチでは、近世の墓域が検出され、土坑墓10基、桶棺墓8基の計18基が検出された。土坑墓の規模は、長辺150cm、深さ40cm程度である。副葬品、骨等は検出されていない。また、溝からは陶磁器類の他に、五輪塔の火輪部が1点出土した。

第2遺構面

良好な遺物包含層を除去すると、12～13世紀の遺構面が検出された。

2トレンチ

柱穴が数基検出され、掘立柱建物が1棟検出された。

S B201

S B201 2間×2間の掘立柱建物で、軒方向はほぼ磁北方向である。

3トレンチ

溝及び柱穴が数基検出された。